
理由がない悪意のクエスト。

星ヲワタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理由がない悪意のクエスト。

【Nコード】

N2565Z

【作者名】

星ヲワタル

【あらすじ】

生活に困った冒険者。つまり僕のことなんだがお金欲しさについて、身の丈に合わない仕事を請け負ってしまった。スライムにトロール。マッドサイエンティストが造った【キラーマシン】、拳句の果てにはベテランの冒険者、あまつさえ王家に選ばれた勇者でさえも手を出さない魔女とまでやりあうことになってしまふ。一緒に戦ってくれる仲間もいなければ、友達もない。孤立無援の貧乏人が、レベル不相応のクエストに挑む冒険ファンタジー。

・冒険のはじまり・

+ + +

僕には友達がいらないし人望もない。もちろん恋人なんてものはいるはずがない。

さらに困ったことに手持ちの金が無ければ、安定した収入もなかった。

友達や恋人はいないことはとても寂しいことだ。それは言われなくてもわかってる。

けれどもそんなことじゃ、人間死にはしない。

甘っちょろい悩みだ。

たいしたことじゃあない。

でもお金が無いとどうだろう？

食料が買えないし、住んでいる部屋の家賃は二カ月滞納するし、水も止められる。

このままでは、住む所がなくなってしまふ。

いやこのままでは死んでしまふ……。

命の危機だ。

この世界を混乱におとしいれる魔王を倒すことが大事？

勇者様を助けるために冒険をする？

そんなモンは知ったこつちゃあない。

こつちは生活することで手一杯だぜ。

そんな感じだから正直、これから世界を救うための冒険者として

やっつていく展望がなかなか見えていない。

この職業に一抹の不安を持っているってことだ。

考えてみれば三年前。

「僕は、世界一の冒険者になる」と言っつて実家を飛び出さしたは良いが、現実はそのなに甘くなかった。

勇者一族の血統を引く人間なら、王家から経済的な支援を受けられるし、なにか他の冒険者が持つてないような特技（例えば魔法）を持つていればギルドからスカウトがきて仕事に困ることもない。

が、僕はサラブレッドでもなければ他人より秀でた特技もない。国からの支援も無ければ、ギルドに頼ることもできないのだ。

冒険者という人生に、僕は完全に行き詰っている。

けれども食べていくためには、モンスターや賞金首を倒してお金を稼がなければならぬ。

だから僕は情報を集めるために酒場に来た。

この町の酒場には、情報斡旋所が併設されている。

なんでそんなところにあるかって言うと、

どうやらこの町の役人が、元々冒険者同士の情報を交換する場として機能していた酒場に、情報斡旋所があればさらに便利になるんじゃないかっていう安易な考えで作ったらしい。

役人の浅知恵で作った割には便利で、よく利用させてもらっている。

そこにはこの地域一帯の様々な情報　賞金首や、倒すとお金がもらえるモンスターの情報。新しいダンジョンが近場で発見されればそれを教えてもらえたりした。

酒場の端っこにある小さなカウンターが情報斡旋所だ。

一人がけの椅子に狭いテーブルがあるだけのそのカウンターは、酒場にあるが酒を飲むためにあるわけではない。

そこには何年もこの仕事を続けているであろう、手と顔に長い時間を物語るシワが深く刻まれたバアさんが座っていた。

「仕事の情報を貰いにきたよ。バアさん」

僕が声をかけると

「おお、また来たのかい。ご苦労さんなことだね」と返事をもらった。

こんな一見気さくなやり取りをするが、お互い名前を知らない。それくらいの薄っぺらな関係なのだ。

仕事の情報を聞ければ良いだけの関係。世知辛い世の中、悲しいことである。

「それでどうだい、なにか良い仕事は入った？」

「良い仕事はみんなギルドに持ってかれちまってるよ。場末のこんな所に回ってくる依頼はどうしようもない下らないものか、ギルドや勇者でも手に負えないようなドギツイ仕事だけさ」

そんな仕事はやりたくない。

けど食べていくためにはやるしかない。お金が無いのだ、仕事を選べる立場ではない。

「レベル3の冒険者でもこなせるような簡単なクエストないの？」

「うーん、レベル3ねえ。今は初心者にちょっときびしいような仕事しかないねえ。アンタ特技はなんだい？」

「……特にないけど」

自分に自信が無かったので小声でささやくように言うと、

「なんだって？聞こえないよ！」年寄りの耳には聞こえなかったらしく聞き返された。

「特にないよ！！自慢できるのは孤独に耐える能力くらいだ！」
聞こえるように少し大きめなけで言いなおした。

「……使えないねえ。今の時代は人より秀でたものが一つ二つ、いや三つ程ないとやっていけないよ。だいたい孤独に耐えるって仲間がいないだけだろ。それじゃあウィークポイントだよ」

「……」

バアさんの言うとおりだ。

「今はアンタみたいな低レベルの戦士が単独でこなせるような仕事はない」

「そこを何とかお願いします」
手を合わせ、まるで神様を拝むようにバアさんに手を合わせる。

「そんなコト言われたってないものはないよ。自殺志願者だったら別だけどね」

死にたくはない。だがこのまま仕事をしなかったら餓死してしまう。

状況的には、引くに引けない。

まるで前門の虎、後門の狼。

「畜生……。僕はどうしたらいいんだ」

「そんなに困っているなら借金でもしたらどうだい？」
何を言っているんだこのバアさんは。

ボケているのか？

冒険者ギルドにも属していない低レベルの戦士に金を貸してくれる金融業者なんて、何処にもない、あるわけがない。

僕が金貸しだったら絶対に貸さない。

「借してくれる所なんてないよ。あー……僕に今だ目覚めぬ眠れる力が宿っていればなあ。その力は強力な魔法で、ドラゴンでも一撃で倒せるみたいだ」

「何、夢みたいなこと言ってるんだい。そんなモノあるわけない

だろ。人生はそんなに甘くないよ！」

軽く怒られた。夢も希望もない人生だ。

「まあ、そんな話しはどうでもいいんだけど、ちょっと無理目の仕事でもいいから、何かない？」

「ないっていつてるだろ！！また違う日に来な」

おそらくもう僕の相手をしたくないのだろ、少し機嫌が悪くなってきた。

「そんなこと言って、良い依頼を隠してるんじゃないの？」
バアさんに食い下がる。

「しつこい！」

怒鳴られた。怒らせてしまったようだ。

これ以上機嫌を損ねたら、依頼を斡旋してもらえなくなる。

僕はこれからの付き合いを考えて酒場を出ることにした。

仕事を見つけることができなかつた僕は、街中をアテも無くトボトボ歩いている。

「町の近くにいるスライムや、吸血コウモリを倒しても金にならないしなあ」

冒険者ギルドに属していれば、迷惑モンスターを倒した場合に討伐料が出るのだが、勝手にモンスターを退治しても何もでない。

骨折り損のくたびれもうけだ。くたびれるどころか死ぬ危険性まである。

なんとか日銭を稼げる方法を考える。

けど思いつかない。

人間、地道に働かなくてはいけない。

けれども今の状況の僕では、それをすることもできないのか。

何でもいいからできる仕事を探そう。

この際、モンスター退治やダンジョン探索の仕事じゃなくても良い。

僕は町の入り口の近くにある自警団の建物へ歩いていく。

自警団とは町を守るために自発的に民衆が集まってできた団体のことだ。

町をモンスターや盗賊から守るだけでなく、治安を守ったりする細かい所では落し物を探したり、道に迷った時なんかは場所を教えてくれたりもするのだ。

僕は人生に迷っているのだがそれは教えてくれないだろう。

そして、仕事を紹介してくれたりもする。僕はここに仕事を探しに来た。

建物の中に入ると、受付がある。

そこにいた女性に、

「仕事の紹介は2階になりまーす」と説明され階段で2階に上がると、向かって左側の壁に賞金首の張り紙があった。

賞金首を捕まえる仕事は、危険なことがあり死ぬことも多いが貰える金額も多い。

腕のたつ冒険者が好む仕事だ。

試しにやってみようかな。

なんて見分不相応なことを考えてみる。

張り紙を見ると、

・狂った科学者の操る【キラーマシン】

研究所を自らが作ったマシンで全て破壊した科学者。犯人以外の研究員は全員死亡。

賞金：150万ゴールド

賞金額っていうのは、敵の強さに比例して高くなる。

この150万って言えば、僕の生活レベルなら半年は遊んで暮らせる金額。

コレは無理だ……。

・墮ちた天使

人を食うことを覚えてしまった天使。一度人の肉を食べた天使はその味を忘れない。

光術系の魔法を使う。

賞金：25万ゴールド

(うーん、これもちょっと敵しそうだな……)

・始の魔女

以前この国を救った英雄の一人。国王に逆らったために賞金首になった。

道具に魔法をこめることができる。

賞金：9999999万ゴールド

「何だこの値段ッ!?ありえねえ………」

魔女の賞金はシャレになってない。一生遊んで暮らせる金額だろコレ。

どれだけ強いんだ。

こんな敵と戦ったら、僕なんかは一瞬で消し炭になってしまうは

ずだ。

僕が張り紙を見ていると自警団の人に話しかけられた。
初老の男性だ。着ているねずみ色の制服は、良い感じに使い込まれている。

古くなってはいるが、キレイな制服。
おそらくベテランの職員。

「兄ちゃん。冒険者かい？」

「ええ、いちおう」

「何か情報あったら、すぐに教えてくれよ」

「いいですよ」と僕が返事をする、

「ただし、キラーマシンと魔女は絶対に手を出すなよ。殺されるのがオチだぜ！ガハハ！」

豪快に笑う。

そんなことは言われなくてもわかっている、僕のレベルで勝てる相手じゃない。

キラーマシンや魔女と言わず、他の賞金首と戦っても一瞬で負ける自信があるぜ。

・冒険のはじまり・・・(後書き)

：ver2 誤字訂正 改稿有

・研究所 - -

+++

「チクシヨウ……」

自警団でもろくな仕事が無かった

保証人がいない人間には、まっとうな仕事がないらしい。

唯一、紹介してもらえたのは『研究所での実験お手伝い』のみ。

仕事の説明が書いてあるパンフレットには、短時間で高収入を目指す人集まれ。

保証人不要。

年齢、経験不問。

給料即日払い。

資格必要なし。

やる気がある人を募集しています。

くわしい実験内容は、集合場所で説明させていただきます。
なんてことが書いてあった。

この募集内容から察することができることは簡単だ。
要するに誰でもいいってことだろ。

「すげえ怪しい。でも給料が高い……」
何をさせられるのだろう。

研究所での実験と言うからには、怪しいクスリを飲ませるの
だろうか。

それとも怪しい人体実験が行われるのだろうか。

怖い。すげえ怖いけどやるしかない。

まあ、とりあえず行ってみて駄目そうだったら帰ってこよう。

いま冷静になって考えてみると、こんな怪しい仕事請けるべきではなかった。

ものすごく甘い考えだったと思う。

この甘い考えのせいで、とんでもない事件に巻き込まれることになるからだ。

仕事するための研究所に着くと、そこには結構な人数が集まっていた。

おそらく20人程。

その中には筋肉粒々で、体中に傷がある戦士や老齢の魔術師がいる。杖は相当使い込まれている。

おそらく二人とも熟練の冒険者だろう。

そして、

「子供までいるッ!？」

頭がすっぽり隠れる、フード付きの真っ白いローブを着た少女。

その服はほつそりとした長い足が全部露出するようなスカート状のつくりになっている。

なんて世知辛い。あんな小さな女の子まで働かないといけないのか……。

もし、万が一、間違っつて、僕が偉くなったら子供が困らない世界を作ろう。

絶対に偉くならないと思うけど。

それと、

「なんか動物を連れてくるやつまでいるッ!？」

何だあれは？

ここは、サーカス会場なのか？

「あれは、【魔獣使い】だよ」

さっきの白いローブを装備した少女に話しかけられた。

（おお、超のつく美少女だ……）

フードをかぶっているので顔の全体は見えないが……見えてる部分は芸術家が大理石から削り出したように整っている。

体のラインこそゆったりとした服を着ているため判断できないが、短いスカートから出たほっそりとした長い足は、年齢不相応の妖艶な雰囲気漂わせる。

左の太もも部分には、古代魔法の文字が刺青として刻まれており、いやでも目がそこにいつてしまう。

白魚のようなほっそりとした指は、美しく長い。

ここには刺青は無く、指輪もしていなかった。

普通の冒険者は自衛の目的から、選ばないだろう純白の魔導着。

その服の縁の部分に描かれた、血のように赤い文字はさらに術者を目立たせている。

服が少女を引き立て、少女もこの服を引き立てる。

一般的な魔法使いがよく使用する、詠唱用の杖は装備していない。持っているのは左右の腕に銀色の腕輪、素材はプラチナ、ピンク色の宝石で古代魔術文字が刻まれている。

おそらくこれが、杖の代わりになっているんだろう。

なんとなくそんな雰囲気がする。

「ねえ、私の話、聞いている？」

「……えっ！？ああ、聞いている、聞いている」
「……えっ！？ああ、聞いている、聞いている」
「……えっ！？ああ、聞いている、聞いている」

「魔法や薬を使って魔物に命令を聞かせているの。連れてくるのは、一角と八龍ね。両方とも強力な使役獣よ」
説明した後に、この辺じゃあまり見かけないけどね。と付け加える。

「おお！お前子供なのにスゴイな！物知りだな。偉いな」
頭をなでてやろうとすると、

バシッ！と手を叩き落された。

「何すんの？」

「こつちの科白だ！せつかく褒めてやろうとしたのに」

それを聞いた少女は、バカを見るような目で僕を見る。
紅い目だ。

僕を射抜くように見つめる、炎のような瞳。

そして、かぶっていたフードをとると、

笹のようにとがった耳が見える。

「エルフか……」

始めて見た。

この種族は、人との接触を極端に嫌うためにめったに見ることがない。

そして、寿命はあきれるほど長く、目の前の少女も見た目どおりの年齢ではないのだろう。

「そうだよ。お兄さんは、ここには何しにきたの？」

「仕事に決まってるだろ」

「ふーん」

意味ありげな目で僕を見つめる。

「何だよ？」

「死んでも知らないよ」

「おい、さっきのどついう意味だよ」「エルフ族の少女に質問する。

「知らない。自分で確かめれば？」

「……………」

チヨット待て。

今から調べようとしたら、実際に仕事してみるしかないわけだから。

意味がわかる頃には死んでるだろ……。

そんなことを考えているうちに研究所の職員による、仕事の説明が始まった。

説明を行うのは、若い女性職員。

「みなさん。今日は実験のために、我がレジーナ研究所へお越しいただき誠にありがとうございます」

そう言われると研究所の中に案内される。

僕達は地下一階まで階段で降りて、そこから一番奥の方にある広い部屋に通された。

「それではこちらの部屋でお待ちください」

それだけ言うと女性職員は部屋から出て行ってしまふ。

今いるこの部屋は相当広い。

ちよつとした運動場、もしくは闘技場といった感じ。

けれども地下にあり、閉鎖されているためだろう、妙な圧迫感があつた。

地下一階にあるけど、遙か上にある窓から光が入ってくるため暗

くはない。

ガチャリ……。部屋の鍵が閉められる音がした。

「えっ！？なんでカギ閉めるの？」

僕がそれを口にしたかしくないかで、

部屋にいた他の冒険者がドアの鍵を開けられるか確認している。

「駄目だ！全然空かねえ！！」と誰かが叫ぶ。

部屋がざわつきだすと、室内放送が始まった。

備え付けのスピーカーから、声が聞こえる。

『それでは、今から実験に関する説明をする』

若そうな男の声だ。

『実験内容は簡単だ。君達には研究所で開発した新型の魔導具と闘ってもらう』

「魔導具？」

僕が疑問を口にするのと、

「魔法の力を動力として動く、戦争用の次世代兵器のことですよ
エルフの少女が答える。

スピーカーから聞こえる声は一方的に説明を続ける。

『君達は実験が終わるまで、この部屋を出ることができない。ここから出たかつたら戦いに勝利することだ』

話しが終了すると、部屋の奥で何かが動く気配がする。

「どういうこと？」

「あの魔導具を壊さないと、この部屋から出られない　つまり
死ぬってことだよ」

「ええー……、聞いてないよ。そんな仕事キャンセルしてやる！」
「犯罪者相手にそんな話は通じないと思うよ」

僕に向かつてにつこり微笑むエルフの少女。

「犯罪者？どういうこと？」

「きつと今にわかるよ」

部屋の奥で蠢く、シルエットはずんぐりむっくりな人間のよう。

こちらに徐々に近づくと連れて、その大きさがわかる。

なんとなく肉食獣（クマのや狼）を連想させる顔、胴体に、不釣合いの細長い手足。

右手には、人間では到底扱えないだろう大型のサーベル。

左手に手は無く、ひじの辺りから小銃が取り付けられている。

足の部分は、うーん、説明が難しい……。

そうだ！昆虫。バッタの足をものすごく丈夫にしたような感じだ。

「うわッ、きも……」

無機質なデザインは不気味さを漂わせた。

（……んん。なんか最近見たことあるような気がするな）

何処かで見た記憶があるような、無いような。

あ！僕は手をポンと叩き、

「自警団の張り紙で見た【キラーマシン】だあ

ッ！！」

と叫んだ。

賞金首じゃねーか。

自警団の親父に『キラーマシンと魔女は絶対に手を出すなよ。殺されるのがオチだぜ！ガハハ！』

って言われていたやつだ。

【キラーマシン】が現れた。

キラーマシンは戦闘体勢をとっている。
左手の小銃を構えた。

「ほらね」

少女がホレ見たことかといった感じで話しかけてきた。

「これはどういことだよ!？」

目の前で起きたことに思考が追いついていかない。

「閉め切られた部屋に賞金首がいる状況が作られた。最初言っていた実験というのは、このマシンの性能テストと言ったところかな

……」

「そんな仕事ありかよ」

「まだわからないんだ……仕事じゃないです」

こんなバカ世界にいるのか。といった感じで僕を見つめる。

「?」

「罨にはめられたんですよ」

僕は賞金首の仕掛けた罨にかかったようだ。

逃げ惑う冒険者達。

それに向かつて【キラーマシン】が左手の小銃で攻撃する。
攻撃を受けた男は、銃弾を受けた後燃え上がる。

なんと消し炭になって死んでしまった。

さらに入り口近くにいた冒険者に向かつて銃弾を打ち込む。

今度は、撃ち抜かれた後に電撃が発動した。

「あの魔導具、魔弾まで使うの!？」エルフの少女が驚く。

「魔弾って何？」

僕が質問すると、

「いちいちうるさいっ！魔法の力をおびた弾丸のことです」
怒りながらも教えてくれる。

圧倒的な攻撃力を見た多くの人間は後ずさる。

たった2回の攻撃を見ただけで攻撃力の違いが解ったからだ。
それほどまでに圧倒的。

高額賞金首である【キラーマシン】の戦闘力は異常。
部屋に絶望に似た雰囲気の流れ始める。

が、その中で勇敢にも戦いを挑む者もいる。

いくつもの厳しい戦闘をこなしてきた、戦闘のプロ。
体中に傷がある戦士と魔獣使いが戦闘態勢に入る。

老魔術師は、まだ戦闘に参加する気配はない。様子を見ているの
だろう。

僕は賞金稼ぎではない。ここは専門家に任せるとしよう。

戦闘の邪魔にならない場所に移動した。

魔獣使いは使役している魔獣を、【キラーマシン】にいつせいに
襲い掛かる。

けれども、全くダメージをあたえられなかった。

二匹の魔獣の攻撃は弾き返され、右手のサーベルでいっぺんに
刀両断される。

【キラーマシン】は左手に装備された小銃で、雷撃の特性の銃弾
を撃ちだす。

魔獣使いに命中。
雷撃によって体が焼き尽くされる。

それを見ていた老魔術師は、

「コレはまずいのう」と話す。

「そんなこと言われなくてもわかってますよ！」と突っ込む。

見れば解る。強力な魔獣を使役している人間が一瞬で殺されたのだ。

・研究所 - (後書き)

：ver 2

誤字訂正

改稿有

・研究所でのアルバイト 終了 - -

+++

部屋の残り人数は、後半分といったところだろうか……。

ずいぶんと減ってしまった。

【キラーマシン】に戦闘を挑んでいった冒険者はみんな死んでしまった。

圧倒的な戦闘能力の差を見せつけられていた。

このままでは、僕が殺されるのも時間の問題だ。

「お兄さん。私に協力してくれるなら助けてあげますよ」

エルフの少女に話しかけられる。

「なにか作戦があるのか？」

喜んで協力しよう。

どうせこのまま手をこまねていてもゲームオーバーなるだけだ。

「お兄さんを私が使う転送魔法でこの部屋から出してあげる」

転送魔法。

人の体を離れた場所に転送する。

高度な魔法技術が要求されるため、使える人間は一握りだけ。

転送できる距離は、術者の能力に比例する。

「おお、使える奴を始めてみた。すごいな君」

頭をなでてやろうとしたら、

ペシッ！手を叩き落された。

兎に角そんな便利な魔法が使えるんだったら、この閉ざされた部屋から脱出できる。

「しかし、条件があります」
「どんな？」

悠長に話してる暇はない。いつ敵に襲われるか解らないのだ。

「実は私の魔法なんだけど……。自分以外の一人だけしか転送できない。魔力の関係から使えるのは一回だけ、そして距離は3mほど」

「短い距離でも、この部屋から出られればいいけど……」

例え僕がこの部屋から出れても、中に残ってる奴は逃げられない。みんなキラーマシンに殺されてしまうだろう。

「それでこの部屋から出て、やってもらいことがあるわ」

「なにをやればいい？」

エルフの少女は頷いて話しだした。

「あそこで暴れている【キラーマシン】、おそらく部屋の外に操ってる奴がいる」

「そうなの？」

「うん。あれはモンスターじゃない。魔法で動く魔導具。だから単独で動くことはできない」

「そういうものなんだ」

僕は頷いて話を聞く。

「そして、操ってる奴なのだけど、おそらく戦闘力は低いと思うわ」

「なるほど。だから僕たちを、この部屋に隔離したわけだ……」

「その通り。だからこの部屋から出た後にそいつを探し出して倒して欲しいの」

紅い瞳は僕を見つめる。

「誰が操っているのか心当たりは？」

「さっぱり……。でもあれ程大きな機械を操っているのだからそんなに離れた場所じゃないはず」

「とりあえず近くを探せばいいかな……」

「そうして見て。ここはおそらく、後10分……もたないと思う」
「……………」

それだけの時間で【キラーマシン】を操ってる奴を見つけて倒す。そんなことができるのだろうか。

二人でやることを確認し終わると、エルフの少女が呪文を唱え始める。

しばらくして詠唱が終わると、僕の体はスライムのようなゲル状になってドアの隙間から出ることができた。

「なんか思ったのと違うな……てかこれ転移魔法じゃなくね」
これって変身して移動しただけだろ……。

魔法により体が光に包まれて移動するのかと思ったら、そうではなかった。

外に出て一番最初にやることは、この部屋のドアが開閉できるかの有無である。

内側から開かなくても、外側からは開けられるかもしれない。

「やっぱり駄目か……」

けどそれは甘い考えだった。

この扉にはドアノブがない。どうやら魔法で開け閉めするタイプのようだ。

急がないと中にいる奴らがどんどん死んでいってしまう。

ドアはあきらめて、当初の予定通り【キラーマシン】を操っている敵を倒すことにした。

辺りを見回すと、似たような扉に同じつくりの通路。

闇雲に移動したら自分が何処にいるか解らなくなる。

(…… 考える、考える、考える)
自分に言い聞かせて集中力を高める。

そこら辺にいる、研究員を締め上げて口を割らせるか……。
いや、そんな時間はないよな。

やることは最短距離で目的地にいつて【キラーマシン】を操っている奴を倒すことだ。

操っている奴は弱い。
だから僕達を閉じ込めた可能性が高い。

ある程度、目星がついた。

「たぶんあそこだ」

近くで身を守ることが出来る安全な場所

僕が今までの部屋は地下一階だった。この建物の最下層の場所である。

ということは、おそらくあの場所にいるに違いない。

1階にある『ミーティングルーム』

ちょうど僕がさつき【キラーマシン】に殺されそうになっていた
部屋の真上に位置する場所。

さつきの部屋が一番近い。
でも階が違うから、この場所に来るまで時間がかかる。
だから安全と考えるのが普通。

目的地に着くや否や、僕はそのドアを蹴破る。
予想通り人がいた。

僕らを地下の実験場に案内した女性だ。

「なんですかアナタは？」

「……まさかアンタが【キラーマシン】を操っていたとわね。悪いけど時間がないから。サクッと殺らしてもらおうぜ」

僕はそれだけ話すと、腰にさしていた剣を抜き相手に突きつける。

「ちょっと待って下さい！キラーマシンを止めますから見逃してください！実験のために頼まれていただけなんです！」

慌てふためく女。

この反応。やはり間違いない。

「ここからじゃあ、【キラーマシン】が停止しているかどうか確認できない……。しかもこの間にも人が死んでるかも知れない。だから駄目だ」

僕はそう話すと、女に斬りかかった。

一撃でカタがついた。

予想していた通り、操っている奴は弱かった。

女が倒れると、彼女の体からアイテムが落ちる。

> キラーマシンの腕輪を手に入れた。

その後、すぐに【キラーマシン】と戦った部屋に戻る。

けれど遅かったようだ。

みんな死んでしまっていた。

一人を除いて

エルフの少女以外は……。

歩きながら考えた。
イロイロなことを

これからの生活、戦い、人生。でも考えるだけだ。いつもどおりだ。

「まずは、自警団に賞金首を倒した報告をしないとな」

賞金首を倒したことなどないのでどういった手続きをすればいいのか勝手がわからない。

まあ、行けばなんとかなるか。そんなことを考えていた。

> キラーマシンの腕輪<を装備した。

手に入れたアイテムはまず使ってみないといけない。

「僕に使うことができるのか」

エルフが使っていたアイテムだ。魔法が使えないと作動しないのかもしれない。

試しに今度の戦闘で使ってみよう。

しばらく歩くと町に着いた。なんとか無事に帰ってくるんできた。
きた。

まずは、自警団の建物へ行く。

そこで賞金首討伐完了の手続きをする。書類に住所と名前、年齢。そして、賞金首を倒した経緯を書かされた。

その後に簡単な、口頭での聞き取りが行われ終了。

後日、現場検証と死体の本人確認が完了したら賞金を受け取るこ
とができるらしい。

だいたい一週間ですむとのこと。

「そんなにかかるのかよ。もう5ゴールドしかもってねえよ」

最初の予定だと、即日で給料がもらえるはずだったのだ。
今日、お金が入ると思ってたのに……。

途中から賞金首討伐のミッションになってしまったのは予定外だった。

けどそんな文句言っても仕方ない。

「まあ、いいや。あの状態で生き残れただけでもめっけもんだ」

今日のところは大人しく家に帰って、有る物で飢えをしのごう。
そしてぐっすり寝よう。

すげえ、疲れた。

家に帰り、部屋に入ろうとすると僕が住んでいるアパートの大家さんに声をかけられた。

「アンタ、ずいぶん帰ってくるの遅いじゃない。何してたんだい？」

（しまった……。今一番会ってはいけない人物に遭遇した）

「いやあ、ちよつと野暮用で……」

「そうかい、まあそんなことはどうでもいいんだけどさ。滞納してる家賃はいつ払ってくれるのかね？」

言われると思った。最近顔を合わせるたびに聞かれる。

なんて金の取立てにきびしいババアだ。

まあ、2ヶ月も家賃を滞納してれば当然のことなんだろうけど。

「あー、ごめんなさい。2週間後には間違いなく払いますんで、もうチョット待ってもらっていいですか」

「何言ってるんだい。そんなの信用できないね！何度同じセリフを聞いたことか」

「そこをなんとかお願いします」

手を合わせてお願いすると大家さんは、

「一週間だけ待ってやる。それ以上遅れたら今度こそ出て行ってもらうよ!」

と吐き捨てるように言うと家に帰っていった。

「ふーッ。やっぱりお金払う期日。長めに言っておいて良かった」
あのババアの考えなんてお見通しだぜ。

そのまま、自分の部屋に入ると一息つく。

「ノドがかわいたな」

そう独り言を言いながら水道の蛇口をひねる。

何も出てこない。

そっだ、水を止められていたんだっ……。

僕は、だいぶ前から水道料金も払っていなかった。

・研究所でのアルバイト 終了
- - (後書き)

：v e r 2 誤字訂正 改稿有

・エルフの少女 -

+++

「スライムって食えるのかな」

そんなことを考えていた。あまりにも腹が減りすぎていたために、家にある食料は全部食べてしまった。

水は公園でなんとかなるから大丈夫だ。

残り少ない手持ちの金で買えるものなんて町になかった。

隣に住んでいる人に言っつて何か食べられる物を分けてもらおうか

……。

でも、朝会った時に挨拶するぐらいの面識しかないのに、いきなりそんなこと言っつたら変な奴だと思われるよな。

そんなことはできない。

賞金の受け取りまで、後6日。

なんとなく町の外に出ることにした。

ここから先はモンスターが出る。

スライムが食べられるかどうか実際に試してみようと思ったのだ。それが駄目だったら、そこら辺に生えている雑草を採って食べてみよう。

しばらく歩いていると、ここら辺で一番メジャーなモンスターに出くわした。

狙いどおりだ。

ブルーの半透明で、ドロドロとしたゲル状の体が特徴のモンスター。

スライムが現れた。

僕は腰にさしてあった剣を抜き、スライムに斬りかかった。スライムにダメージをあたえる。

スライムの反撃。

弾力性のある体で体当たりしてきた。

僕は吹っ飛ばされて地面を転がる。

「いつてええ！」

結構なダメージだ。

世界で一番弱いモンスターなのに大苦戦だ！
体勢を立て直してもう一度、斬りかかる。

スライムに剣を避けられた。

スライムは、体をムチのようにしならせて攻撃してきた。
急所に入った、鈍い音がする。大ダメージ！

僕はスライムの攻撃の反動で地面に叩きつけられた。
当たり所が悪かったんだろう。

口から血が出る。

「ヤバい……。内臓がやられてたら重症だ」

僕は逃げ出した。

「情けねえ……」

スライムにさえ勝てないのか。
いや、きつと腹が減っていたせいだ。
間違いない。

そうに決まってる。

そうであって欲しい。

ダメージを受けた所を確認したけど、大丈夫なようだ。

血が出たのは、口を切っただけだろう。

「ハア〜」

大きなため息をつく

「キヤ　　！！」

女性の悲鳴が聞こえてきた。

声のするほうに駆け寄る

すると少女がモンスターに襲われてる。

人間の大人の5倍はあるだろう大きさ、緑色の醜い体。

手には巨大な棍棒。

「トロルかよッ!？」

何でこんな所にいるんだよ。

比較的安全なここら一帯の地域には出現しないはずのモンスター。

腹をすかせて山から降りてきたのだろうか。

なにせよスライムに歯が立たない人間では倒せるわけもない。

トロルが現れた。

トロルは少女に向かって棍棒を振りかざす。

「あぶねえッ!」

そう叫ぶと僕は、その場にタツクルするような体勢で飛び込み、少女の体を抱えて敵の攻撃をかわす。

棍棒の強力な一撃ですさまじい轟音と共に　　地面が砕けた。
大きな穴が開く。

意表を付かれたトロルは攻撃をミスした。

トロルは体勢を整えている。

どうしようあんな攻撃食らったら一撃で終了だ。
僕の人生が。

少女と一緒にいるので戦闘から逃げることもできない。

少女はどっかで見た真つ白い魔術師用のローブを着ている。
袖とスカート、そしてフードの部分に赤い文字の紋様が描かれていた。

高度な魔術文字を意味するものだ。

(この間のエルフの少女だ)

「大丈夫か？」

少女に声をかける。

「はい、なんとか」

避ける際、何処かに頭をうつたのだろう。

頭を左右にフルフル振っていた。

だが今はそんなことを気にしている場合じゃない。

「逃げられるか？」

他の選択はない。

エルフの少女にそう尋ねると、

「ごめんなさい。足をくじいたみたいで……動けません」と答えた。

「マジかよ」

「私を置いて逃げてください、あとは自分でなんとかしますから死ぬつもりだ。」

さすが冒険者だ。死に際を心得ている。

「そんなことできるかよ」
「言いながらもトルルはどうすることもできない。
どうしよう。」

「では私が呪文を唱えている間、時間を稼いでもらっていいですか」

「わかった！」

無理無理無理無理。

いきおいで返事しちゃったけど絶対無理。

無理だけどそれしか選択肢は無い。

彼女にはトルルに対向出来る魔法があるのだろう。

彼女の方を見ると、すでに詠唱に入っている。

もう移動はできない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう。

棍棒を受け止めたら僕が死亡。

棍棒を避けたら少女が死亡。

どちらにしても死人が出る。

そうだ、まだ使ったことないけど……

>キラーマシンの腕輪くを使った。

地面には光の魔術文字で描かれた魔方陣が現れた。
それに光が集まり【キラーマシン】が実体化した。

キラーマシンが戦闘に参加する。

トルルはキラーマシンに向けて強烈な一撃を放ち、棍棒がキラーマシンにきれいにヒットした。

激しい音が

ノーダメージ。

【キラーマシン】は戦闘態勢に入っている。

- ・使える武器は右手のサーベル。
- ・左手に小銃　魔弾が撃てる。
- > 雷撃の弾丸< > 氷撃の弾丸< > 炎撃の弾丸<
- ・特殊能力：> 自爆<

僕は右手のサーベルを使い、攻撃を命令する。

キラーマシンがトロールに襲い掛かり、サーベルで切りつける。
グチャリ　という鈍い音がした。

トロールの頭は剣圧によって潰されて、体は真っ二つになり倒れる。
トロールを余裕で倒した。

「うわぁ……。エグい」

僕の目の前にいたトロールは、グチャグチャの真っ二つになって死んだ。

キレイに分断されているのではなく、力任せに切り裂かれた感じ
で。

「ありがとうございます。私の魔法は必要ありませんでしたね」
助けたエルフの少女に笑顔で話しかけられた。

「いやいや、……。まあね。怪我はない？」

自分が使った【キラーマシン】の威力に自分でドン引きしながら
答える。

「たいしたことはありません。大丈夫です」

先程の戦闘で詠唱していたスペルは黒魔法の一種……。

エルフの魔法使い。

でもおかしい。そんなエルフが存在できるのだろうか。

森の守護者であるエルフ族が使う魔法は、黒魔術ではなく精霊な

のだから。

助けた少女は足をくじいていたので「おぶって町まで行ってあげようか?」

と提案したが断られた。

きつと恥ずかしいのだろう。

でも、ちようどいい。

少女を背負っていったら、僕の残り少ない体力は無くなり死んでいたかもしれない。

もちろんトルルではなくスライムにやられた時の傷が原因で。

「そう言えば君。純粋なエルフなの?」

「はい、そうです。こちら辺では珍しいのですか?」

「あんまり見ないね。こちら辺は辺境だから」

(さすがエルフ、超美形だ)

超可愛い。いや、美しいといった方がいいだろう。

一見すると幼い感じがするのだが、ひとつひとつの所作が落ち着いている。

エルフということから、見た目どりの年齢ではないのだろう。

特徴である長い耳と同じく、大きな目も少しだけつり眼でありそれがなんとなく色っぽい。

唇は桜色で、髪はブロンド、そして瞳は紅い。

(紅い眼のエルフ……)

柔らかそうな唇から言葉が紡がれる。

「無駄な脂肪や筋肉が無いスリムな体つきですね」

「……まあね」

「ヒョロいだけだ。貧乏で何も食ってないから細いんだよ。」

「きつとレベルもすごく高いんですね？」

「……まあ…ね」

レベルは3しかありません。

「>キラーマシンの腕輪<はお兄さんが持っていたんですね……」

「えっ？なんで？」

「いえ、何でもありませんよ……」

最近強い敵を2体ほど倒しているが、自力で倒していない。

キラーマシンは操っている女の人を倒しただけだし、トロールはキラーマシンが倒した。

これではレベルが上がるわけがない。

町の入り口が見えてきた。ここまで来れば安全だろう。

とりあえず彼女の怪我を見てもらうために医者に行かなくてはいけない。

・エルフの少女・・・(後書き)

：ver2 誤字訂正 改稿有

・フィウオン レイニーのお礼 - -

+++

エルフの少女を医者に見てもらったところ、怪我はたいしたことないらしい。

軽い捻挫だそうだ。

「ねえ、さっきの件とこの間の研究所での件をお礼したいんだけど?」

紅い瞳が僕を見つめる。

「別に気にしなくていいよ。当然のことをしたまでだから」

「ご馳走しますよ」

これは飯にありつけるかもしれない。

今日のところは、これでなんとかしのげる。

「じゃあ、せっかくだからご馳走になっちゃおうかな」

「そうしてください。このままお礼もせずに帰ってしまったら申し訳ないし」

「ではお言葉に甘えて」

僕たちは、食堂やレストランが集まっている通りに行ってお店を探すことにした。

歩きながら会話する。

「まだ名前、言ってなかったよね。私の名前はフィウオン・レイニー。剣士さまはなんて言うのかしら?」

「名乗るほどの名前ではないよ」

一度は言ってみたかったセリフだ。

ていうか下手に名前を教えたらレベルがバレる。これでも一応、冒険者として国に登録されているのだ。

「ふふッ、変った方ですね」

ピンク色のちいさな唇の端が、ほんのちょっとつりあがる。

「ていうか剣士さまって言うのはやめてくれ。そんなガラじゃない」

まともに剣を使えてないので。

今日なんてスライムも倒せなかったので。

「いいよ。じゃあ今まで通りお兄さんって呼んであげろ」

「そうしてよ」

エルフの年齢がわからない。

僕はなんて呼べばいいのだろう、なんて考えていると、

「私のことは、フィウでいいよ」と言われた。

「わかった」

敬称が『ちゃん』にすればいいのか、『さん』にすればいいのか解らん。

とりあえず呼び捨てでいいや。なんか言われたら変えよう。

しばらく歩くと目的の通りに到着した。

中央のほうまで歩いていくと高級レストランが並ぶ場所に出る。

「ねえねえ、お兄さん、お兄さん。食事はこのレストランなんてどつ?」

「……………」

すげえ高そうなレストランなんですけど。

城でもないのに、なんで店の前に門があるの。

門のところには、衛兵の代わりに黒い礼服をきた男が立っている。

「わたし、ここで食事したいなあ」

紅い瞳に見つめられると、なんとなく逆らうことができない。

「僕は別にかまわないけど、この格好じゃ断られるんじゃないかな」

小汚い皮の服、しかも帯刀している。

こういった場所は、きちんとした格好じゃないと断られるはずだ。

「きつと大丈夫だよ。わたしが確認してきてあげるね」

フィウは、礼服の男に近づいていった。

彼女は、男と一言、三言会話すると、こちらに手を振ってきた。

「OKだつて」

(……まじっすか)

僕はこんな高そうな店で食事したことが無かった。

店に入ると、背広を着た男に案内される。

僕は持っている剣を預け、フィウは上着を男に渡す。

上着を脱いだ彼女は、袖がない白いワンピースだけになる。

背の低さや体のシルエットから幼く感じていた雰囲気、よりいっそう強くなった。

ほっそりとした長い足に続き、あらわになる白い両腕。

冒険者とは思えないような、傷がないきれいな肌。

赤い文字の刺青があるのは、左の太もものところだけのようだ。

スカートの少し下、根元に近い場所の後ろ前に円を描くように刻まれている。

手や腕はもちろん首のところや、胸元もきれいなものだ。

なんとなくフィウに目がいつてしまう

それを見ていた彼女は、僕に妖しく微笑みかける。

通された席は、道路側で窓から外を見ることができた。

僕はお店の人にメニューを手渡された。

「さーて、何を食べようかな」

と思ったが字が読めねえ。

ていうか値段が載ってない。

「お飲み物はいかがでしたしょう？」

(えっ、何か頼まないといけないんですか……)

飲み物を注文しないといけないような雰囲気、その場に流れる。だがメニューが読めないのでどんなモノがあるかわからない。

「フィウは何頼むの？」

彼女だったら、この何だか解らない文字で書かれたメニューを読むことができるであろう。

なにせ、自分でこの店を選んだのだから。

同じものを頼んでやる。

「お兄さんと同じものでいいよ」

「じゃあ、アルコールが入ってないやつでさっぱりした飲み物って、どんなモノがあります？」

やられた。

無茶振りだ。

仕方ないので、お店の人に適当な質問をする。

「ではグレープフルーツと炭酸水を使った、当店オリジナルのノンアルコールカクテルなどはいかがでしょう？」

「おいしそうですね。ではそれを2つお願いします」

「かしこまりました。それでは、今お持ちいたします」
疲れる。右も左もわからないから非常に疲れる。

「良い雰囲気だね」

「そうだね」

どんな料理があるんだかさっぱりわからね。

その後、飲み物を持ってきたお店の人に片っ端から、メニューに載っているのはどんな料理か聞きまくった。

ていうか食っているモノがうまい。

子牛のなんと煮込み、なんとか風という覚えられないような名前の料理。

ソースが絶品で、肉が舌の上でとろけるようだ。

目の前のフィウが、僕に話しかけてくる。

レストランの中の暗い部屋でロウソクの火が揺れる。

その火に照らされたフィウの体が、少し艶かしく映し出された。

「よかったら。その>キラーマシンの腕輪<をわたしに譲ってくれないかな？」

「え？」

「わたしにくれたら、とってもいいこととしてあげる」

「……………」

「どんなことだと思っ？」

「さあ」

「とっても気持ちいいこと」

「ダメだ。子供がこんなモノ持ってたら危ないだろ」

フィウは子供だかどうかかわからんし、僕が持っていてても危ないことには変りないけど。

「ちえー」

舌打ちをして悔しがるフィウ。その反応だけ見るとホントに子供のようだ。

「ご飯を食べ終わると彼女が泊まる予定の宿まで送って行くことになった。

「明日、この町を案内して欲しいな」

「うーん、明日はちょっと忙し……」

言いかけたところで、フィウに話しかけられる。

「案内してくれたら、お礼に300ゴールド出すよ」

「マジッすか」

「ご飯代も私が出してあげる」

やるしかねえ。どうせ明日の仕事のアテがあるわけではないし。

「引き受けよう。僕がこの町を案内してあげるよ」

「そう。ありがとうっ、お兄さん……」

これで明日の食ぶちは確保することができた。

・フィウオン レイニーのお礼 - - (後書き)

：ver2 誤字訂正 改稿有

・狙われるフィウオン レイニー

+++

朝の市場は、たくさんの人でにぎわっていた。

主に食料がメインで扱われているので、普通の人は見てもあまり面白くないのだけれど、フィウは楽しんでいるようだ。

物珍しそうに、色々な店を見て回っている。

朝食は市場にある広場で食べることにした。

「ところでフィウはこの町には何しに来たの？」

「観光」

彼女は売っているものを手に取りながら答える。

「こんな辺境に、わざわざ観光に来るなんて変ってるね」

この国の首都からは遠く離れ、一年を通して極寒の枯れた土地は作物も育たない。

住むのには、過酷過ぎる環境には動物もほとんどいない。

低すぎる温度は、モンスターでさえ拒絶する。

「そう？結構面白いわよ」

「それなら別にいいけど」

そんな話をしていると、僕らの隣でご飯を食べていたカップルの世間話が聞こえてきた。

「役人から聞いたのだけれど、この近くに【鉄の騎士団】が来ているらしいわよ。噂だとこの町を狙ってるんじゃないかって…」

…」

・【鉄の騎士団】

荒くれ者の元傭兵が集まってできた私設部隊。しかし、騎士団とは名ばかりでやっていることは盗賊と変わらない。

彼らに襲われた町は、すべての物が奪われ、何も残らない。

この地域には、この町以外に彼らの獲物としてめぼしいモノはない。

十中八九、この町を襲うつもりだろう。

「どうしたの？」

黙り込んでいる僕にフィウが話しかけてきた。

「ああ、なんでもないよ。フィウ。観光は今日で終わりだ。僕が送ってあげるから、君の住んでる町に帰ろう」

【鉄の騎士団】に襲われたら、ろくな警備体制が敷かれていない、この町はひとたまりもないだろう。

「もしかして、【鉄の騎士団】を気にしているのかしら？」

「なんだ。聞いてたんだ。じゃあ、話は早い」

「逃げるの？」

紅い眼が僕を見つめる。

「そうだよ」

当たり前だ。まがいなりにも私設部隊、それを相手にして勝てるわけがない。

「でもきつとこの町の人たちは戦うわ。自分の住んでいる場所を守るために」

そんなことはわかってる。

極寒の荒地を一から開拓してきた人達だ。

自分たちが作り上げてきた町を安々と明け渡すはずはない。

「そんなこと言ったって、お前はどうするんだよ」

口調が少し荒くなる。

「あなたが戦うのなら、私も協力してあげるわよ。剣士さま」
彼女は僕のことを挑発するように言った。

私設部隊、【鉄の騎士団】を相手にすることになった。

「あれだけ偉そうなこと言ってたんだからなんか良い案、あるんだろうね？」

僕はフィウに尋ねると、

「お兄さんの意見を先に教えてよ」と答えた。

まあ、いいや。僕の作戦をまず話そう。

「もう少ししたら、いや【鉄の騎士団】がこの町に来ることが確定したら 自警団による対策本部が設立されると思うんだけど」

「お兄さんは、それに入って戦うんだね」

フィウはうれしそうに言うてくる。

なにがそんなに楽しいのだろう。

死ぬかもしれないのに、いや死ぬ確率のほうが圧倒的に高いか。

「いや駄目だ。そんなことしてたら、敵を叩くチャンスが無くなる」

彼女の言ったことを否定する。

「じゃあ、どうするの？」

無邪気な子供のように、僕に尋ねてくる。

「地の利を生かす。溪谷を抜けるために使う、山を回りこむように作られた一本道がある。奴らがそこを渡り終わる寸前に爆破する」

対策本部ができるのなんて、敵が町の近くに來てからだろ。そんなの待ってたら、相手の良いようにされるだけ。

敵が多かるうが、少なかるうが、戦力に余裕があるうが無かるうが先手を取ることが大事なんだ。

少しでも、こっちが有利な状況に持ち込む。

「え？でも渡ってる最中に壊した方が、たくさん敵を倒せるんじゃないの？」

「そんなことしたら、生き残って逃げた部隊の奴らに体制を立てなおす時間を与えることになる。だから、まずは退路を断つ」

「残った奴らは？」

「溪谷の橋を使ってきたらそこで迎え撃つて　橋を落とす」

「橋を使わないで山中を抜けてきたら？」

相手はプロの戦闘屋だからそっちの可能性が高いだろう。

わざわざ橋なんて、トラップしかけやすそうな場所使わないよな。

「まあ、橋を使えないように落としてから　うーん、あんまりやりたくないんだけど山に火を放つ」

「え　ッ？」

僕の言ったことに驚くフィウ。

「なにか？」

山に閉じ込めて、全員焼き殺す。

「ちょっと、やりすぎなんじゃないの？」

「だからやりたくないって言ってるだろ。でも、普通のやり方でやったら勝てないよ」

「キラーマシンは使えないの？」

「あれは駄目だ」

僕は【キラーマシン】を使っている間、無防備になる。
少人数ならまだしも多人数を相手にしたら一気にボロが出て、スキをつかれて殺されるのがオチだ。

「まあ、でもその案は却下ね」

フィウは、そんな話にならないわといった感じで両手を挙げて僕に言い放つ。

「なんで!?!」

意味がわからない。

これ以上の作戦なんてあるのか。

フィウは、黙って自分のとがった耳を指差す。

「……………」

そうだ彼女は、エルフだ。

エルフを目の前にして、山を燃やすとか 非常にマズイ。

殺されても文句言えないレベルだった。

エルフは山を住処として、精霊と共に生きているのだから。

++++

僕は【鉄の騎士団】が陣営を敷いた場所のど真ん中に座り込んでいた。

鉄の騎士団の兵士達が、僕の周りにたくさんいる。武器の手入れをしたり、仮眠をとったり、簡単な食事を取ったり、話し合ったりしている。

数は40人ぐらいの一個小隊といったところだ。

(……………思ったより数が少ないな)

だが、僕のことを気に留めるものは一人もいない。
なぜならフィウの魔法によって僕の体は透明になり、見えなくなっているから。

しかし、見えないといっても敵の陣営の真っ只中、僕自身気が気でない。

見つかったら確実に殺されるだろう。

(ていうかこの作戦って、結局のところ正面突破だよな)

僕の考えた奇襲は、全面的に却下されたためフィウの考えた作戦が実行された

それはとんでもない考えであり、言うなれば大胆不敵なモノである。

どうしてこんなことをすることになったのか。

フィウの言葉に乗せられたからだろうか……たぶん違う。

>キラーマシンの腕輪<という強い力を得て、舞い上がっていたせいだ。

自分で気づかないうちに慢心していたのだろう。

うまくやれば自分の力で解決できるかもしれないと勘違いしてしまっただのだ。

結局のところ、それは【キラーマシン】という道具の力であり僕自身の能力とは全く関係ないのに。

今から3時間前

フィウは僕にとんでもない内容の話をする。

「いい？まずは相手を近くまでおびき寄せろの」

「それで？」

「相手はこの町を襲うために一度、軍の体制を整えるから、その時に強襲する」

「体制を整えるとは限らないよ。僕が敵だったら野営なしで町を攻撃する」

時間を置けば置くほど、相手に準備する時間を与え、攻略するのが厄介になる。

傭兵上がりの軍人がそんな悠長なことやるとは思えない。

「大丈夫。相手は油断している」

「うーん。【鉄の騎士団】の噂を聞く限りじゃそんな感じしないけどな」

「賭けてもいいよ」

彼女はそう言うけど、賭けに勝とうが負けようが関係ない。

選択ミスして死ぬのはゴメンだ。

「まあいいや。相手が野営をすると仮定して、その後どうやって相手とやりあうつもりなの？」

「お兄さんと、わたしで協力してやっつけるの」

「……………」

無茶苦茶だ。

殺してくださいといわんばかりの作戦。

「まあまあ、話を最後まで聞いてよ」

「どーぞ」

一応最後まで聞こう。

「ちよつと見ててね」

フィウがそう言うと、彼女の気配が希薄になる。

そして、存在が認識しにくくなり、やがていなくなる。

「消えた！」

僕はあわてて前後左右見回す。

何処にも彼女の姿を確認することができない。

「どう?」

いきなり彼女の姿が現れた。

「うわッ!? いきなり出てくるなよ!」
びっくりした。

何と言つかパツと出てきたというよりは、彼女の姿を気づくことができていなかった感じがする。

「いきなりしか出られないの。でもコレは使えろと思わない?」

「ああ、すげえな」

完璧に姿を消す技術もすごいけど……。

全く詠唱しないで魔法を使っていた方が驚きだ。

どういう仕掛けなんだ。あの腕輪に秘密があるんだろうか。

まあ今はそんなこと、どうでも良いけど。

「この魔法を使えば、気づかれないで敵のふところまで潜り込めるわ」

「潜り込んでどうするの?」

「キラーマシーンを使う」

フィウは右手の人差し指を立てながらそう言った。

「だから、あれはダメだって」

対少数数用の武器だ。

「操っている人間が何処にいるか解らなければ大丈夫だよ」

「うむむ」

確かにその通りだ。

キラーマシンを使う時のネックは二つある。

操るために近くに居ないといけない。

操作に集中するため無防備になる。

姿が見えなければ攻撃されることもない。二つの弱点を解消することが出来る。

単純に考えればだけど。

「わたしの魔法で、戦場に絶対攻め込まれない見えない城をつくる」

「……………」

「そして、そこでお兄さんが戦うの。わたしは絶対に本丸まで攻め込ませない」

フィウには相応自信があるだろう。

全く引く気配がない。

「わかった、とりあえずそれで行こう。でも、相手が野営しないで突っ込んできたらこの作戦は無しだよ」

「いいよ。絶対に突っ込んでこないから」

彼女は胸のところで腕を組み自信ありげにそう言う。

なにを根拠にそういうことを言えるのか。その時の僕にはわからなかった。

・狙われるフィウオン VS 【鉄の騎士団】

+++

僕は敵陣で、姿が見えなくなる魔法を使用中だ。

フィウの右手人差し指には、赤い火がともっている。

僕の常識的には、魔法使いの出す魔方陣は地面に書き込んだり、浮かび上がったたりする平面的なものだと思っていたのだけれど……。彼女の出したそれは、空中に光が投影されるカタチで存在していた。

僕らの周りを円を描くように、光の文字が立体的に浮かび上がる。どれだけ高度な技術なんだろう。それを操るフィウの精神力も相応なモノのはずだ。

【鉄の騎士団】は、フィウに言われたとおり、見通しの良い平原に陣営を敷いていた。

何と言うか、完璧に油断している。

これから町に進撃しようとしている軍隊には見えない。

まあそれだけ、余裕ってことか……。

「よし、陽が沈む前にカタをつける」

どうせ僕とフィウは見えないのだから、闇にまぎれて襲いかかる必要はない。

視界が良い時に、仕掛けたほうが僕の狙いが定めやすい。

僕はフィウに戦闘を始める合図すると、彼女はそれに頷く。

>キラーマシンの腕輪くを使用した。

【キラーマシン】が戦闘に参加。

何も無いところから不気味な機械が現れたことに驚いた【鉄の騎士団】はあわてふためいている。

逃げ惑う兵士に向かって>雷撃の弾丸くを打ち込む。
兵士を一人倒した。

丸腰の兵士に向かってサーベルを振り下ろす。
兵士を倒した。

テントに向かって>炎撃の弾丸くを打ち込んだ。
激しく燃えさかるテント。

上半身はだかの兵士はキラーマシンに、剣で斬りかかった。
ノーダメージ。

キラーマシンはサーベルで反撃した。
兵士を倒した。

燃えさかるテントの中で兵士が3人倒れた。

兵士が弓でキラーマシンを攻撃。
ダメージを与えられない。

>雷撃の弾丸くで反撃。
兵士を倒した。

奥にあるテントに向かって>炎撃の弾丸くを使用した。
テントは、激しい炎に包まれる。

圧倒的なキラーマシンの性能。

いくつもの戦闘をかいくぐってきたはずの【鉄の騎士団】兵士が
いともたやすく殺されていく。

こちら側の一方的な攻勢は、僕の気分を悪くさせた。

人を殺すのは良くないことだ。そんなことはわかっている。

けどそんな中で、命のやり取りにおける人間の存在の重さみたいなモノが、全く感じられない。

このままだと自分の感覚がおかしくなっていく。

人を殺すことに何も感じない人間になってしまふ気がして怖くな
った。

「これからが本番ですよ」

フィウにそう言われ現実に戻された。

戦闘中に余計なことは考えてはいけない。

考えることは後だ。

鉄の騎士団、

【蛇騎士】 【サムライ】 【呪い師】 【炎使い】 が現れた。

6人の兵士が現れた。

サムライがキラーマシンに斬りかかる。

キラーマシンのボディに傷がついた。

呪い師が呪文を唱えると地面から泥の手が生え、キラーマシンに
掴みかかる。

動きが鈍くなりサーベルが当たらない。

炎使いが口から炎を吐くとキラーマシンにヒット。ノーダメージ。
しかし、勢いが衰えない炎が透明化している僕たちの方にもせま

る。

(うわッ!?)

炎はフィウが作った魔法陣にはね返される。
姿を消して魔法も防御できる。
すごい。

【猛獣マスク】が出現とともに、キラーマシンに襲いかかりダメージを与える。

戦闘は続く。

奥の方から、

「このデカ物を操っている奴が近くにいます。そいつを見つけてブチ殺せ!」

と良く通る叫び声が聞こえる。

キラーマシンを近くで操っていることが敵に悟られた。

(……でも、いる場所はバレてない。まだいける)

キラーマシンに>雷撃の弾丸<>氷撃の弾丸<>炎撃の弾丸<を乱射させる。

その場にいた6人の兵士を倒した。

蛇騎士、炎使いと猛獣マスクを倒した。

サムライは>雷電八刀流<を使用。

8本の刀がキラーマシンに一気に襲いかかる。

呪い師が筒のような銃を取り出し>不死鳥の弾丸<を撃った。

8本の刀でボディは切り刻まれ、弾丸がめり込む。
キラーマシンは、大ダメージを受けた。

さすがに凄腕の兵士の集まり。
簡単に勝たせてくれない、キラーマシンも結構なダメージを喰らった。

けれどもまだまだ致命傷は受けていないし、僕達が隠れている場所もばれる気配がない。

このまま押し切ればなんとかなる

「……ん??」

キラーマシンの動きが止まる。腕輪に全く反応しない。

魔力がなくなったため動かなくなってしまった。

「え　　ッ!? 燃料切れとかあるのかよ!」

よく考えてみたら無尽蔵で動くほうがおかしい。

けど動いてもらわないと困る。

キラーマシンが動かなければ、僕にはもう打つ手がない。

最初にして最後の切り札。

これが無ければお話にならない。

そんなことは、お構いなしに【鉄の騎士団】が動かないキラーマシンに襲いかかる。

呪い師は自分の命を犠牲にして>ヤマタノオロチくを使用した。

地面から八つの頭を持つ巨大な蛇が出現し、キラーマシンに攻

撃。

呪い師は死んでしまった。

大蛇に噛まれ、左腕がちぎれ右手も壊れた。

ボディは全損。

キラーマシンは壊れてしまった。

僕の装備していた、腕輪も碎ける。

「終わった……」

敵はまだ半分以上残っているというのに……。

僕の切り札がなくなった時点で戦闘は終わった。

姿を消したまま、戦闘場所を離れようとしたが（少なくとも僕はそのつもりだったんだけど……）あっけなくフィウは魔法を解いた。僕らの姿は透明ではなくなり、敵から確認できるようになる。

それを見た、敵の顔色が変わる。

先程、部隊に指令を出していた男が

「やつぱりお前の仕業だったのか、始の魔女さんよ」と言った。

「なんだわかってたのなら話は早いじゃない」

僕の隣にいるフィウがいつもより大人っぽい声のトーンでそれに答える。

僕は状況をイマイチ理解できずにいた。

フィウが超高額賞金首の【始の魔女】？

フィウは「降参するわ。私たちはこれ以上関わらないから、見逃してくれない？」と言う。

（なにを言ってるんだ、いまさらそんなの無理に決まってる……）
僕がそうを考えていると、

それを聞いた先程と違う男が、

「バカヤロー！！こっちは死人がでんだぞ！見逃すわけねーだろ！！」

と叫んだ。

思ったとおりの返答。

「手負いのあんた達じゃ、私に勝てないわよ」
フィウはこんな状況にも関わらず余裕の表情で答える。

けど僕の考えとは裏腹に、この交渉に食いついてきた奴がいる。
さつき部隊に指令を出していた男だ。

おそらくコイツがリーダーだろう。

「お前が腕につけてる、魔法具を寄こしたら考えてやってもいい
ぜ」

そう言つと口の端をつり上げ、いじわるく笑った。

「わかったわ」

あっさりと承諾するフィウ。

「オイッ！魔法具渡したら終わりだろ！」
魔法具がないと術が使えない。

しかし、僕の話など聞いてない感じで、フィウは手首から銀色の腕輪を外して男に向かって投げる。

フィウの銀の腕輪が男の足元に転がる。

それを見た、指令を出していた男は、

「へへへ、バーカ。これでお前は魔法は使えねえだろ。残ってる
奴らでこいつらをぶっ殺せ！！」

やっぱり思ったとおりの反応。

僕はここで死ぬことになるらしい。

と思つたが違った。

「【鉄の騎士団】が戦闘体勢に入ると、

」

フィウの目の色が変わる。

そして

「フィウオン・レイニーの名において命ずる

>フライング<と言うと、

自動防御魔法が発動した。

血の色をした無数のハチドリが彼女の周りを飛び回る。

彼女の詠唱が終わるまで自動的に防御。

【百識】

両腕の魔術制御を解除した

フィウオンの両手首に、血の色をした古代魔法文字が円を描くように刻まれる。

紋様一つにつき魔力は2乗される。

紋様は3個、フィウオンの魔力は8倍になった。

魔力の増大により使える魔法が増える。

フィウオンは>血のイカズチ<を唱えた。

フィウオンの周りに、円く波立つ血の色の雷。

波紋が広がる。

【鉄の騎士団】 に向かって、血の色をした静かな雷が襲いかかる。

音も無く死んで行く兵士達。

地獄から聞こえる叫び声。

【鉄の騎士団】 は、跡形も無く消滅した。

一瞬でカタがついた。

ていうか腕輪は無くても魔法使えるんだ……。

ていうか僕、いらなくね。

ていうか今まで【始の魔女】と一緒にいたんだ。

・狙われるフィウオン その後

+++

敵を片付けたフィウはまがまがしいオーラを放っている。黒い眼球の中に紅い眼がある。

超怖いんですけど。

「ところでお兄さん。キラーマシン無くなっちゃいましたね」
そんなフィウに話かけられる。

「そうですね」
なぜか敬語になる。

「あの機械は何のために研究所で開発されていたか知っていますか？」

「?」

「実は、私を倒すために作られていたんです」

「?」

「研究者がわざわざ賞金首リストに載せて、キラーマシンと腕利きの冒険者を戦わせて実験していたんですよ」

「……」

【始の魔女】を倒すために開発された【キラーマシン】

だからあんなに戦闘力が高かったのか。

その前に、あの機械は魔女に対向するための手段だったわけだ。それに危機感を感じたフィウはあの機械を探っていた。

僕に付きまとい、キラーマシンの腕輪を欲しがってたのは、それが理由だ。

「まあ、でもキラーマシンの戦闘能力も見れたし、本体も壊れたし、ヨカッタヨカッタ」

フィウが黒くて紅い目で僕を見つめながら笑う。

「……」
はめられた。

「あと付け加えておくけど【鉄の騎士団】が狙ってたのは、あの町じゃなくて賞金首の私ですよ」

「あー、なるほど」

どつりで町に攻め込まないわけだ。僕の早とちりってわけだ。

そうか早とちりで無くなったんだ、あの部隊。

【鉄の騎士団】の目的はフィウを倒すため。

フィウの目的は【キラーマシン】の性能確認とキラーマシンの腕輪への破壊。

僕はフィウの手の中で踊っていただけ。

情けねえ。すべて彼女のいい様に物事が進んでいる。

「さてここで問題です。私の正体を知ってしまったお兄さんは、これからどうなってしまおうでしょう？」

悪魔のような表情と明るい声のトーンが全く合ってなくて怖い。

「やっぱり、口封じ的なコトをされるんですかね？」

殺されるのだろうか。

「ぴんぼーん。正解です。でも、お兄さんのことはお気に入りなので、私の使い魔になるんだったら助けてあげますよ」

「……」

「私に名前を教えてください」

「魔女に名前は教えない」

「使い魔にはならないって事でいいですかね」

「言うまでもねえ」

これでゲームオーバーだ。

「じゃあ 目をつぶって。苦しくないようにしてあげる」

「……………」

まあ、良かったでしょう。

【鉄の騎士団】は全滅させられたし、高額賞金首に殺されるなら冒険者としての面目もたつ。

餓死するよりマシだ。

本当は死にたくないけど。

どうあがいても勝てるわけがない。

僕は目をつぶった。

「じゃあ、いきますよ」

フィウが動く気配がし、僕は死ぬ覚悟を決め、

マブタをいっそう強く閉じる。

「ッ!?!」

唇にやわらかい感触。

びっくりして目を開けると、フィウにキスされていた。

悪い冗談だ。全然、笑えない。

まがまがしい雰囲気は消え、目の色もいつものキレイな色に戻っている。

「えへへー、トロルに助けてもらった時のお礼です」

「何言ってるんだ」

その件は、ご飯を食べさせてもらった時に片付いているはずだ。

「殺しはしませんけど、しばらく監視させてもらいますよ」
とりあえず助かったんだろうか。

「……………ふう」

ため息をつく。疲れた。ひたすら疲れた。

僕はそのまま目を閉じると、深いまどろみの中に身を落とした。

・大家さんからの依頼

+++

「水だ！この家、水道から水が出るぞ！」

僕は当たり前前のことを、おおげさに喜ぶ。
滞納していた水道料金を払ったら水が出るようになった。

約一週間前に倒した敵の賞金を、ようやく受け取ることができたのだ。

次はこのボロアパートの大家のところに行かないといけない。
さっさと滞納している家賃を払わなければ、この汚い部屋を追い出されてしまう。

「いやあ、すみませんでした」

僕は2ヶ月間、滞納していた家賃を大家さんに渡す。

「まったく。ようやく持ってきたかい、次からは遅れるんじゃないよー！」

大家さんに注意される。

「わかりました」

払うアテがあれば家賃なんか滞納しないよ。
と考えながら大家さんの話を聞く。

では僕はこの辺で失礼しますと言って帰ろうとすると、

「ちよつと待ちな」

呼び止められた。

「なんですか？」

「確かアンタ冒険者とか言ってたね」

長い人生を歩んできたものにししか出せない意地の悪そうな声で、僕に確認する。

「ええ、一応」

レベルは低いけどな。

「ちょっと仕事を頼まれてくれやしないかい？」

嫌な予感しかしない。

「別にかまいませんけど、どんな依頼ですか？」

家賃を滞納していた手前断ることができない、強制的に依頼を請けることになる。

「山に行つて、とつてきて欲しいものがあるんだよ」

「いいですけど、クマとかは獲つて来れませんよ」

僕が死んでしまうからだ。

「なに言つてんだい。そんなモン頼みはしないよ。直角ウサギとりんごをとつてきて欲しいんだ」

・【直角うさぎ】

角を持ったウサギ、移動する時は必ず直角に動く。

その身は食べることができ、柔らかい毛皮は売ることできる。

・【りんご】

名産品の果物。この地方で取れるりんごはとってもおいしい。

「いいですけど。いつまでにとつてくればいいんですか？」

「明日の朝までには欲しいね」

「無理ですね」

きつぱりと断る。

実質のところ、今日中じゃねーか。

今はもう夕方、今から山に入ったら夜になってしまう。

夜の山はとても危険だ。僕の手には負えない。

「チツ。しけてるね。じゃあ明日中でいいよ」

「それならいいですよ」

(……舌打ちされた!?)

このババア、人に物を頼む態度じゃねえ。

僕は【直角うさぎ】と【りんご】をとってくる依頼を受けた。

「よっしや ツー！」

【直角うさぎ】をようやく倒した。

2時間以上かけて捕獲。

うさぎを斬りつけようとすると直角に避けられ、僕が体勢をくずしたところに角で突っつかれる。

というのをずっと繰り返され、けっこうなダメージを受けた。

初級者向けモンスターに苦労しすぎだろ……。

でもあと残っているのはりんごを取ってくるという、ごくごく簡単なミッションだけなので心配ない。

山を下って、しばらく行くと【りんご】がなっている木がある。

そのまま進んでいくと、看板があった。

『クマ注意!』

と書いてある。

「ほっ」

クマが出る山には、良くある看板だ。
きつと注意していれば大丈夫なのだろう。

ガサツ 物音がする。

「……ッ!？」

びっくりした。

クマが出現したのではなく、音がただただということを確認してほっと胸をなでおろした。

なんだかんだ言ってもやっぱり怖いのだ。

だが、クマはモンスターと違う。

無差別に襲いかかってくるわけでわない。

例え遭遇しても目をそらさずにゆっくりと後ずされば大丈夫。

……なはずだ。

大丈夫じゃなかった場合はもれなくアウトだ。

クマは力が強い。木に登る。足が速い。

僕のレベルでは勝てないので注意することしかできない。

でも実際のところはいくら注意していても、気の立っているクマにあつたらどうにもならないんだけどね。

直角ウサギもまともに倒せない冒険者には手に余る。

そんな感じでクマにビビりながらも、しばらく歩き丘を登るとりんごの木がある平地に着く。

無事、りんごをゲットした。

なんだ。

思ったより今回は簡単だったな。
直角うさぎは少し苦労したけど。

「てつきりクマとバトルになるかと思っただが、そうはならなかつ

た」

きつと最近、激しい戦闘ばかりしていたので感覚がおかしくなっていたのだ。

いくら冒険者といえども、そうそう命のやり取りをしていたらたまらない。

命がいくつあっても足りなくなる。

「なんならババアに依頼されたモノを届けて、もう一回とりに来てもいいくらいだ」

食料を確保しておけば、お金が無くなっても困らない。

転ばぬ先の杖だ。

どうせまた金欠になるのが目に見えているのだから、保険をかけておく必要がある。

「よし。もう一回やるか！」

僕がそう言うと、

なにか僕の後ろに回りこんだ気配がする。

クマかッ！？

後ろをゆっくり振り向くと、クマではなく知らないおっさんがいた。

「このりんご泥棒が！大声で『もう一回やる』とか叫びやがって。ずいぶん大胆な奴だな」

「すいません。自生している自然のりんごだと思ってたんです…

…」

どうやらさっきのあれは、りんご農園の木だったらしい。

長い時間をかけて無実の釈明をした後に、理由を説明してりんごを売ってもらった。

「あのクソババア……」

僕が今住んでるボロアパートの大家に頼まれた、直角うさぎとりんごをとってくるといふ依頼。

結局ただ働きだった。

お礼をもらえなかったのだ。

ババアにすれば家賃の延滞料金のつもりなのかもしれない。

むしろりんごを購入した分マイナスだった。

賞金首を倒してもらったお金も、そろそろ無くなってきたしどうしようか。

まあ、そんなこと言っても仕方ない。

地道に働くしかないだろう。

今日はエルフのフィウと会う約束をしていた。

始の魔女にして超高額賞金首。

強大な魔力は、一個小隊の敵でさえ一瞬で滅ぼす。

昼までにはアパートに戻らなくてはいけない。

約束に遅れたら殺されたりするのだろうか。

僕はアパートに戻り、ドアの鍵を開けると誰かいる。

ちょうど部屋の真ん中にある丸いテーブル。

その横にある備え付けの椅子に、背筋をまっすぐにしてフィウが座っている。

まるつきり少女の外見には不釣り合いな真っ黒なショートパンツに同じ色のタンクトップ。

その上からシヨールをコートのように羽織り、足には一般的なモノよりもさらに短いショートブーツを履いていた。

光を吸い込むような闇のシヨールは、長方形の端下の部分を丸くカットしてある。

小さい体には少し大きめではあるが、細くて白い足と腕を目立たせていた。

ブロンドの髪と黒は、相性が良くコントラストが美しい。

「他人の家に勝手に入るな」

僕は文句を言う。ていうかどうやって入ったんだ。

「ごめんなさーい」

棒読み。

「……くッ」

反省している様子がまったくない。

気を取り直して質問する。

「今日はどうしたの?」

なんか用があるから、わざわざ会いに来たんだろ。

テーブルに両肘を着いて、僕を見つめる。

狭くて汚い、今にもぶっ壊れそうなアパートに高そうな服を着た美しいエルフ。

なんてシユールな映像だろう。

フィウは少し間をおいて話した。

「お兄さん。そろそろお金がなくなってきたんじゃないのかなと

思っ

「……」

「ご名答だ。」

「そんなお兄さんに、仕事を探してきてあげたよ!」

「ええ……」

そんなこと頼んでないし。

大家のババアに続いて、嫌な予感がする。

「ねえ。一緒にしよう?」

フィウはイスから体をのりだし、甘えたような声を出しながら顔を近づけてくる。

彼女は僕の手を取り、両方のあったかい手でやわらかく握りしめる。

すごく気持ちいい。

「どんな仕事なの?」

僕がそうつたずねると

子供のような顔がいやらしくゆがんだ。

・フィウのお仕事

+++

僕はフィウの仕事を手伝うことにした。

「それで、どんなことをするの？」

フィウは質問を聞くと説明をはじめた。

「MAP商會に捕まっている【エルフの少年】の救出が目的……」

【MAP商會】

天才、ウォーリー氏がたった一代で築いた巨大な会社。

主に投資で利益を出している。投資対象は武器製造、薬や人体の研究をする会社に限られる。

「エルフつながりって訳だ……。その子供は何で捕まったの？」

フィウの知り合いなのだろうか。

「奴隷商人にさらわれた後、売りに出されたとのことですよ」

「何でまた……」

「希少種のエルフは高い値段で取引できるの。姿かたちも、きれいだから人気もあるらしい」

酷い話だ。

人間代表とまでは言わないが、僕が助けられるならそれに越したことはない。

「わかった、手伝うよ。それでなんで僕の助けが必要なの？」

フィウの魔力は高い、軍隊と戦っても勝てるのではないだろうか。そんなエルフがなぜ、何の戦力にもならない僕が必要なんだろう。

「MAP商会は守りが異常に堅くて、正面から侵入するのが難しい。例え侵入できたとしてもセキュリティが厳しくて、中を動き回って調べることはできないと思う」

「ちよつと待って。あの強力な魔法でも正面突破できないの？」
一個小隊を蒸発させた。赤い色の雷。

「MAP商会は兵器会社と強い繋がりがあるから 新型の武器で武装した兵隊に一度に攻め込まれたら、わたしでも間違いなく殺されちゃうよ」

「そんなに強いんだ」

あんな強力な魔法を使えるエルフが対抗できない 想像できなかった。

「何言ってるの、お兄さんが使ってた【キラーマシン】あれだつて、これからの時代の武器だよ」

「……………」

そつえばそつだ。

僕のような低レベルな戦士でも使えるようなバケモノ。

トロールを一撃で切り裂き、手だれの兵士や冒険者を何人も倒した、悪魔の機械。

もう魔法だけ使つてれば戦闘に勝てる時代じゃないんだ。
だからと言つて僕がいてどうにかなる問題なのだろうか。

「実は3日後 MAP商会主催の新型戦闘用マシンお披露目パーティーがあるらしいんです」

「なにそれ？」

「もう、にぶいな。それに、わたしとお兄さんがカップルとして出席するんです。エルフ一人だと怪しまれる可能性があるからパーティーだったら屋敷の中に難なく入り込むことができる。」

しかも、大きな会社のパーティーともなると、大勢の人が来て警備も手薄になるはずだ。

「なるほど」

そして、たいていのエルフは人間が嫌いだ

火を使い自然を壊し、争うことが理由だと聞いたことがある。

それなのに、一人で武器のお披露目パーティーにいたらおかしい。

「わたしがパーティーの最中に屋敷の中を探索する」

「わかった。僕はそれを手伝えればいいんだな」

二人で探せば、見つけるのも速くなるはず。

「いや、それはわたし一人でやるの。お兄さんには他にやることがあるわ」

僕にできることなどあるのだろうか。

「何をすればいい？」

「詳しいことは、まだ時間が有るから後で説明するけど。大まかに説明しちゃうと、ひと芝居打ってもらいたいのよ」

顔を覗きこむと、彼女の紅い眼が揺れていた。

新型戦闘用マシンのお披露目パーティーが開かれる会場。

フィウが持ってきた（何処から手に入れたのかわからないが）招待状を使って侵入することができた。

MAP商会。

町外れの高い丘にあり、人を拒むように建っている。

会社というより要塞という方がふさわしい。

建物の周りには、（おそらく侵入者を防ぐためだろう、高い壁が存在している。

この中に捕まった【エルフの少年】がいるはずだ。

馬鹿でかい門のところで細かいセキュリティチェックを受けて中に入った。

当たり前だが武器は持ち込めない。

僕とフィウはパーティーのために正装していた。

服は比較的動きやすいものを選んだが、

「動きづらい」

なれない服には変りなく、動くたびに違和感がある。

「我慢してください」

フィウはそう言う。

いつもは口数の多いフィウ、でも今回の依頼の件を始めてから極端に話さなくなった。

きつとそれだけ難解な依頼なんだろう。

パーティ会場に着くとたくさん人であふれかえっている。

中央に食事をするための丸いテーブルが配置されており、壁際にはさまざまな武器や防具が並べられていた。

銃器の弾はさすがに抜かれていたが、実際に手にとってモノを見ることができている。

でも、今日の最大の目玉である新型マシンはまだ無いようだ。

会場の中央に目をやると、今までより多くの人が集まっている場所がある。

その中心には、このパーティーの主催者であるウォーリー氏がいた。

それを見たフィウが言う。

「ではそろそろ始めましょうか」

今回の作戦。

フィウが言うにはウォーリーにはエルフが必要らしい。

実験に使うらしいのだ。人間に比べて、はるかに長く生きるエルフを調べて、人の寿命をのばす薬を作ろうとしている。

死なない、もしくは長生きできる薬が完成すればこの会社に大変な富をもたらす。

もし自分の命より長く生きることができるようになったら、いくらでも金を出す奴がいるだろう。

僕からウォーリーに話しかけようとしたが話しかけられない。

取り巻きが多いのももちろんだが、たくさんの護衛もついており近づくこともできないのだ。

しかし、

「あいつはきっと新しいエルフを欲しがるはず」

それが彼女の言い分だ。

フィウに興味を引いてワナにはめようとしているのだけれど話すことができないのならやりようがない。

しばらくすると、紅い眼のエルフに気づいたのであるう、ウ

オーリーがこちらに近づいてきた。

「はじめまして。このパーティーを主催させていただいているウ

オーリーと申します」

あちらさんから話しかけられた。

僕は、

「こちらこそ、ご紹介いただきありがとうございます」

とありきたりの返事をする。本当の所は、他人の紹介状で入った

身なので招待はされていない。

「パーティーは、楽しんでいただけられていますか？」

「ええ、もちろん。……一番の楽しみはこれからなのでしょぅけど」

「ああ、メインイベントの話ですね。今までにないタイプの兵器なので、きっと驚かれると思いますよ」

「なるほど。それは期待できますね……」

どんな恐ろしいモノが出てくるんだろう。

「どんな品物なのかは、後ほど説明いたしますよ。ところでとてもお美しいお連れ様ですね」

フィウのことだ。

「ああ、彼女は私の屋敷で働いてもらっている使用人なんですよ」

「エルフが使用人！？そんな……信じられないですね」

それはそうだ。誇り高いエルフが人間の言いなりになるなどありえない。

「実は、いわくつきのエルフでしてね。目の色を見てみてくださいいい？」

「……ッ！？目の色が違う」

ウォーリーは驚いている。普通、エルフの目はブルーだからだ。

僕は話を続ける。

「この目の色でエルフの里を追い出されたりしいのですよ。そこで僕が拾ってやったのです」

ここまででは台本通りだ。

僕の話に食いつくウォーリー。

50代前半とのことだが、実際の年より若く見えた。

何と云うか存在感のある人物だ。

「ほう、それはスバラシイ。いや、……大変でしたね」

「もしや、エルフにご興味がおありですか？」

本題を切り出す。

「ええ、それはもう。エルフと一緒に生活できるなんて夢のようではありませんか」

実際のところは、研究に使うのが目的なんだろうけど。

「よかつたらこのエルフ。お譲りしましょうか？」

「えっ!？」

表情を一変させ驚く。よほど興味があるのだろう。

「……いや、忘れてください。初対面でこんな話をするものではありませんでしたね」

僕は、いったん話を取り下げる。

交渉をやめるのではない。エモノに針をより深く喰い付かせるために。

「いえいえ、とんでもない。……もしそのお話し、本気でしたら、

お礼はそれなりにさせて頂きますよ」

ウォーリーは面白いほど話に乗ってくる。

「なるほど。まあ僕はどちらでもかまわないのですが……あとは、彼女くださいね」

僕はフィウのほうに顔を向けた。

その話を聞いたフィウが口を開く。

「ご興味を持っていただきありがとうございます」

それを聞いた。ウォーリーは彼女に話しかける。

「どうです、よかつたら私の元で働いてみませんか？それなりの待遇と報酬を用意しますよ」

「まあ、素敵です。でも、私を欲しいのなら条件があります。それで宜しければかまいませんが」

「ほう、どんな条件でしょう」

「ゲームをしたいわ」

「ゲームですか？」

あっけに獲られた顔をする。よほど意外な提案だったのだろう。

「ええ、私は人と争うのが大好き。私が欲しいのなら力づくで奪ってみて」

妖しく微笑むフィウ。

「なるほど。そういうことでしたらかまいませんよ。どのようなゲームでしょうか？」

迷いが無い、それだけエルフが欲しいのだろう。

「そうですね。では」

「なんででしょう？」

「【鬼ごっこ】をやりましょう」

「はて？聞いたことがない遊びですね」

その言葉をきいたウォーリは困った顔をした。

「ルールは簡単です。追うものと追われるものを最初に決めて、追いかけてこを行うのです」

「わかりました。でそのゲームは何処でやりましょう？」

「私、この場所が気に入ったわ。ここでやりましょう！私が追いかけられる方（鬼）ということですよ。よろしいかしら？」

「これから、あなたが働く場所になります。気に入ってもらえて良かった」

「制限時間はこのパーティーが終わるまで、私を追いかけるのは何人使ってもかまわないわ」

それを聞いた僕は耳を疑った。大事なパーティーの最中にやるのかよ。

そんなの相手に乗ってくるのだろうか。

「いいでしょう」

「では私が鬼で…、10分後にスタートです」

「いいでしょう。メインイベント前の余興にはちょうどいい。必ずあなたを捕まえて見せましょう」

話に乗ってきた。

下手したら新製品の発表会もだいなしになってしまうだろう。

そんなにエルフが必要なのか

・フィウのお仕事 終了

+++

鬼ごっこが始まった。

と言ってもこのゲーム、フィウが負けるはずがない。
彼女は魔法で姿を消すことができるからだ。

問題なのは、僕がどうやって逃げ出すかなのだが
僕の手には、フィウがいつも使っている【銀の腕輪】がある。
彼女の話では

昨日。

「パーティ会場に侵入できたら、その間この腕輪を持っていく
ださい」

「これでどうするの？」

「前に私が姿を消す魔法を使ったのを覚えていますか？」

「鉄の騎士団と戦った時だね」

「そうです。実はあの魔法は、その腕輪で消えることができたの
です」

「なるほど」

「タイミングとしては、私が【エルフの少年】を助け出す、もし
くは殺した後に使ってもらいます」

「ちよっと待ってくれ。助けるのはわかるけど、殺すって何だよ
？」

「……奴隷として売り買いされた時点でまともな状態で生きているかどうかわかりませんから」

確かにそう言えるだろう。例えば人体実験、もしくは言えないようなことをされて……。

「助けられないような状態だったら殺すっていうの」「僕は彼女に質問した。」

「そうです」

フィウは短くそれだけ答えた。

言いたくない事なんだろう。同族を殺すんだから当然だろう。

「わかった。それはわかった。でそれから僕はどうすればいい？」

「少年を救出したら、その腕輪の力を発動させます」

「発動？」

「その腕輪の力を私が発動させると透明になります」

「なるほどね。じゃあ、僕は体が透明になったら逃げればいいわけだ」

単純なことだ。

姿が消えたら逃げればいい。

姿を相手から見られなければ、いくらでもやりようがある。

しかも、この魔法の能力は、この前の戦闘で折り紙つきだ。

「……」

それを聞いたフィウは、返事をしないで頷くだけだった。

+++

けっこうな時間がたった。

フィウたちがやっている鬼ごっこゲームの間にもパーティーは進んでいく。

間もなく、メインイベント。
タイムリミット。

このパーティーが終わったら僕らの負け。

ちなみにウォーリー氏は、鬼ごっこには参加していない。
パーティーを進行しなくてはいけないからだ。

鬼を追いかける役は、彼の会社の社員が選出されている。

なかなか終わらないゲームに僕は少し焦ってきた。

いや焦る必要はない。

そもそもこの勝負に勝ち負けの概念などなくて、姿が消えたらこの会場からいなくなればいいだけなのだから。

「それにしても遅いな」

僕は腕に装備してある、フィウから預かった銀の腕輪を見つめる。
装飾に使われている、ピンク色の宝石が光る。

「おお、珍しいものを持っていますね」

それを見た、ウォーリーに声をかけられる。
うかつだった。

この腕輪の能力を知っている人間に見られるのはマズイ。
怪しまれる可能性がある。

「これが何なのか知っていますか？」
僕は質問した。

「ええ、噂で聞いたことがあります。見るのは始めてですが、
虐待を受けた少女の腕輪【】ですよ。魔力を封印するための」

「え？何ですって……」

体を透明にするための道具だろ、これは。

「ご存知ありませんでしたか。はるか昔、王家に強力すぎる魔力を持った女の子が生まれた時に、強力な魔女によって造られたモノらしいですよ。魔力が暴走しないように押さえつけるための道具として」

「……………」

ちよつと待て、姿が消す魔法が使える道具じゃないのか……ウオーリーが嘘をついているとか。

いや、そもそも今の時点（ゲームの最中）は、嘘つく必要がないのではないか。

・【虐待を受けた少女の腕輪】

プラチナの腕輪に、ピンクダイヤモンドが埋め込まれている。ダイヤモンドで模られた魔法文字によって装着者の魔力を抑えつける役割がある。

生まれつき魔力が強力すぎた王女様のために、宮廷魔術師が製作した。

奇才カダローラによってデザインされたその腕輪は、装飾品としての価値も非常に高い。

今の話が本当だったら僕はどうやってここから逃げればいいのだ。なんでフィウは、僕を騙したのか。

僕の頭は混乱していた。

間もなくゲーム終了の時間だ。

黒服の男がウオーリー氏の近くにきて、何か耳打ちしている。

黒服の男から話を聞いたウォーリー氏の顔色が変わった。

「どうやら君とあの紅い眼のエルフの目的は、捕まっている【エルフの少年】の救出だったようだね」

(……バレたか)

「まんまと騙されてしまったようだ。しかしなんだね。君は逃げてなくていいのかな？」

「どういうことですか？」

逃げたくても逃げられないんだよ。姿を消す魔法が発動するまで動けない。

ていうかそれが頼みの綱なのだ。

「どうやら紅い眼のエルフは、【エルフの少年】を殺して逃げたしまったようだ……。私の部下が見たんだよ」

「なんだって！？何かの間違いじゃないのか？」

フィウは透明なのに、なんで見ることができるとんだよ。

「残念ながら間違いではないらしい。君は見捨てられたのさ」

フィウが魔法を失敗するとは思えない。

見つかるようなへまをしたとも思えない。

ということはワザと見られるようにして逃げたってことか。

「そんなハズはない！」

一応反論しておく。

腕輪の使い道が違う時点で、相当妖しいが反論しておく。

「何を言ってるんだね君は気づいてないのか。はめられたんだよ、あの紅い眼のエルフに」

「どういうことだ？」

ここまでできたら、僕もまたハメられたと思うがとりあえず口には出さない。

「我々が奴隷商人から購入した【エルフの少年】は知ってるかね？」

「……………」

もちろん知っている、それを助けるためにここに来たんだから。でも、そんなことは正直には言えない。

「まあいい。【エルフの少年】を奴隷として売り買いする。そんなこと、誇り高きエルフ族が黙っていると思うかね？」

「もちろん黙ってないはずだ。だから助けにきたんだ」
下手したらエルフ族と戦争になる危険性だつてある。

「しかし、あれはもう駄目だ。【エルフの少年】は人体実験の失敗により、もう普通の体ではない。あれじゃあ、ただの怪物だよ」

「最悪だ。戦争になるかもしれない」
最初に懸念していたことが現実になった。

やはり奴隷として取引された以上、まともな姿で生きてはいなかったのだ。

可愛そうなことをした。
だから殺して逃げたのか。フィウは。

そして、僕の言葉を聞いたウォーリーは信じられないことを言い放った。

興奮した様子でこういった。

「戦争？いいね。」

いいじゃないか。

最高じゃないか。

戦争になればいい。

私たちは戦争屋だ。

戦争が始まれば人が死に、新しい兵器開発が進み、我々の財産が潤う」

「狂ってやがる」

こいつ頭がおかしい。

「だが、それを邪魔しようとする愚か者がいる」

「……………」

僕のことだろうか。

「君じゃあないよ。あの紅い眼のエルフだ。彼女は怪物になった

【エルフの少年】を殺し　もうこの屋敷から逃げ出した後だ」

「さっき聞いたよ」

最初の予定だと。フィウが逃げるときは僕も透明になってるはずだった。

遅くなっているのは、【エルフの少年】が見つからないからと考
えていたが……………。

どつやら違ったらしい。

「君は愚か者だ。実際の所【エルフの少年】が無事戻らない以上
戦争は避けられない。でもまだ、一つだけ方法がある！成功するか

どうかはわからんが」

「どんな方法だよ？」

話が見えてこない。

こいつがなにを言っているのかさっぱりわからない。

「いいかね。エルフ族ではない、人間の君が【エルフの少年】を助け出すんだ。そして、助けた後に死ぬんだ。我々と刺し違えて！」

「はあ？何言ってるんだ。そんなこと無理に決まっているだろ」

現に僕は、周りを兵士に囲まれ身動きが取れない。

「残念だ。そんな残念な頭をしているからエルフに出し抜かれるんだよ！君は！」

「なんだと！」

酷い言われようだった。

「あとでツジツマを合わせるんだよ。そんなもの紅い眼のエルフが、エルフの里に帰った時にそう言えばいいだけだ。人間の男が自分の命を引き換えにしてエルフの少年を助けようとした。それで、十分じゃないか。人間がさらったエルフを、人間が助けようとした！いい話じゃないか！感動するじゃないか！その涙モノの英雄譚でオトシマエをつけて戦争を避けようとしているんだよ！」

・フィウとの関係 終了

「……………」
なるほど。

本当にそんなことできるかどうか分からないけどやってみる価値はありそうだ。

おそらくエルフと人間が戦争になったら、戦闘力で劣るエルフは惨敗するだろう。

フィウにしたら、それを避けようとしているのかもしれない。
僕は死ぬけど。生け贄として。

「まあ、いい。興ざめだ。君にはショーを盛り上げるのに協力して頂こう さあ、みなさん！ショーの始まりです！！勇敢な少年が、我々が開発した新型マシンと対決してくれるそうです！！！果たしてどちらが勝つのか。では、デスマッチのスタートだああ！！！！」

ウオーリは会場の客に聞こえるよう叫ぶと右腕に>キラーオメガの腕輪<を装着。

「………… ツ！？あれは」
マジツすか！？

あの腕輪は僕が前に使ってたヤツと同じタイプだ！
最悪だ。

魔法を動力として動く機械。

【キラーマシン】

そのの新型かよ！？この会社が製作するのに力を貸していたわけだ。

どれだけ強力なのか想像も持つかない。

僕がうるたえるのもかまわず。

ウォーリーは叫び続ける。

「それでは、みなさん！ショータイムの始まりです！！！！！」

ウォーリーは、>キラオメガの腕輪<を背広のポケットから取り出し装備した。

戦闘フィールドに、光で魔法陣が描かれる。

（マジで、やべええ！！）

あんな殺人機械が出てきたら一瞬で殺されて、ジエンドだ。

ウォーリーのフィウに対する怒りの矛先が完全に僕のほうに向いている。

憂さ晴らしで殺されるのか。

でも、ちょっと待てよ。

魔法陣、……魔法。

そう言えば、僕が使っていたキラマシンも魔法で動いてたな。もしかしたら、アレが使えるかもしれない。

「いちかばちかッ！」

僕は半ばヤケになって>虐待を受けた少女の腕輪<を魔法陣に向かって投げ入れた。

透明になれないバツタモノの腕輪。

魔力を封じ込めるための腕輪。

ヒュン……。魔法陣から情けない音がした。

僕の予想外にく虐待を受けた少女の腕輪>が魔法を封じ込める。うまくいった。

ウォーリーは【キラオメガ】の召還に失敗した。

うわ……ていうかウォーリーの言っていたことが本当だった。フィウから受け取った腕輪は、姿を消すためのモノではなく。魔力を封じ込めるものだったのだ。そう言えば、フィウも腕輪外してから強くなってたよな。

【キラオメガ】を呼び出すことができなかったウォーリーは、「なんだとッ!？」
驚く。

その一瞬の間を見て 僕は、

テーブルの上にあったバターナイフを取り、ウォーリーを羽交い絞めにした後、彼の首にそれを突きつけた。

(……こんなもので人が殺せるのだろうか)
と思ったが。

思ったより効果テキメン。ナイフを突きつけられた、ウォーリーは両手を上げて全く抵抗しなくなった。

武器を取り上げられればただの親父なのだ。

僕は、彼の右腕にはめられた腕輪を取り上げる。

>キラオメガの腕輪を手に入れた。

一応戦闘には勝利(……)と言えるかどうか疑問だが)できたが、ピンチであることには変りない敵陣営の真っ只中なのだから。

(さて、どうしようか)

「……フウ　　ッ」

大きなため息をつくウォーリー。

「どうしました？」

「いやね。まさかこんなカタチで、会社の新型マシンが敗れるとは思ってもみなかったものでね。とんだ欠陥品だ」

「なかば反則ですけどね」

「いや、負けは負けだ。死んでしまっただけいい訳もできないしね」

「じゃあ、どうするんですか？僕は死ぬまでやってもかまいませんけど」

嘘だけだ。そんなことするつもりは全くないのだ。

ハツタリである。

「降参しよう。ただし条件がある」

「なんでしよう？」

降参するのに条件つけるのおかしいだろ。

一応聞くけど。

「君の腕につけている>キラーオメガの腕輪と、あそこに落ちている【虐待を受けた少女の腕輪】を交換してもらいたい」

「かまいませんよ」

おそらく研究に使うのであろう。

二度と同じ手で負けないために。

僕の言葉を聞くと頷き、

「それでは帰りました。そして、安心したまえ。今日のことに関しては不問にしよう。訴えもしなければ、もちろん報復もしない」と言ってきた。

「なんでですか？」

「今回の取引は成立した。約束を守るのがうちの会社のモットーでね」

「さすが商売人の鏡ですね。ひとりの人間としてはどうかと思いますが……」

僕は命からがら、無事に屋敷から出ることができた。

・新型マシンはかわいい女の子

+++++

新しく手に入れたアイテム。>キラオメガの腕輪<を使ったら可愛い女の子が出てきた。

そいつは出てきていきなり、

「私に名前をつけて下さい」と話す。

「名前付けろって言われても……。キラオメガって名前何じゃないの？」

「それは商品名です。正式名称はXXGP-52Aと言います」

「うーん、名前ねえ。急に言われても思いつかないなあ」

「それではとりあえず保留にしておきます」

【キラオメガ】

予想と全く違うものがでてきた。

前に僕が使っていたものは、手に銃器や剣が装備されてる
い
かにも戦闘用って感じの機械だったけど。

今回の奴は普通だ。

いや武器としての見た目は普通じゃない。むしろ異常だ。

茶色い髪にあどけない顔、背は僕より低く肌の色はこの地域でよく見られる色。

年齢は僕と同じくらい、10代後半と言ったところだろうか。

そこら辺にいる、ちょっとかわいい少女と言えば一番解りやすいかもしれない。

(まあ、機械に年齢っていうのもおかしいか)

「ていうか君。勝手に動けるんだね」

前のモデルは意識を集中させてないと動かなかった。

「ハイ、自動操縦AIが搭載されていますので」

「すごいな。なんか話せるし」

「簡単な会話だったら可能です」

なんか普通だな、イロイロと。この分だと戦闘能力は期待できないかもしれない。

「ちよつとモンスターと戦闘してみるか」

「了解です」

僕らはモンスターと対戦するために町の外に出てきた。とりあえず試運転だ。

目の前には、2匹のスライムがうろろしている。

「じゃあ、試しにあそこにいるスライムでも倒して」

「了解です」

彼女（機械だけど見た目が人間なので、僕はこう呼ぶ）は、スライムの所までとことこ歩いて行く。

それを見て、とても不安になった。

少女のような見た目による勝手な先入観からなんだろうけど、か弱そうなその姿はモンスターと戦えるとは思えなかったからだ。いきなりスライムに、やられて壊れはしないだろうか。そんな心配が

ある。

【キラールオメガ】は、スライムに攻撃。
殴りかかった。

「え　　ッ!？」

パンチかよ……。前使ってたヤツはいきなり銃弾を撃って、相手
ボコボコにしてたのに。

とんだ期待はずれだ。

あんな細腕で殴ってもダメージを与えられるわけがない。

スライムが彼女に殴られた。

そのパンチの威力でスライムが、ほんの少し飛ばされる。

(まあ、外見の割にはいいパンチしてるな)

なんてことを僕が考えてたら

次の瞬間。

スライムが爆発していた。

ドーン!という派手な音を立てて。

スライムがパンチだけで、木っ端みじんになった。

あとかたも無くなっている。

うわあ、なにこの威力……。

「……じゃあ、今度はロングレンジ(長距離)用の攻撃をやってみて。そうだな、あの馬鹿でかい岩に向かって打ってみよう」

「あれですか」

そう言って近くの岩を指差す。

「違う！違う！あんな近くの岩じゃなくて、一番遠いヤツ」
どうせとんでもない代物なんだろ。

そんな破壊兵器に、巻き込まれたらたまらない。

「わかりました」

と言った彼女の周りに、いくつもの光の玉が浮かびあがる。

その中の何個かが、光の矢になり岩に突き刺さる。

派手な爆発音とともに岩が砕けた。

（岩がコナゴナになってる……いや蒸発したと言っほうが正しいかもしれない）

「なにその悪魔みたいな威力の魔法」

「>ホーリーベルくです。天使が使う光術系の力を改良したもので360度、全方向に攻撃可能です」

「ホーリーベルって言うより、裁きの雷って感じだけどな……もつと出力下げられないの？」

「無理です。これ以上下げられません」

「あー、今ので一番低いんだ……」

「はい」

（駄目だ。使い物にならない……）

弱いからじゃない、スペックが高すぎて手に余るのだ。
前のヤツもそうだったけど、今回はもっと酷い。

これでは子供のケンカに戦車を持ち込むようなもの。
例えが変だけど。

まあ、戦争用の機械だ。
力があって当然なんだろうけど。
戦闘での攻撃力は高ければ高いほどいい。

「稼働時間は連続でどれくらいなの？」
「フルパワーで動き続ければ30分ほどで動けなくなりますが、
一般生活レベルの動きでしたら一日中活動可能です」

「燃料はどうやって補給すればいい？」
「人間の皆さんと一緒に食事で大丈夫です」

「……………」
ええ、ご飯食べるのかよッ！？
食いブチが増えた。
うち洒落れにならないくらい貧乏なんですけど……………。
僕一人、まともに養えていないと言うのに。

「どうしました？」
「あー、君しばらく戦闘しないで良いや……………」

食事代節約のために。

「ストップ！スト　　・　　ップ！」
「なんででしょう？」

僕らは、食事と燃料補給のために大衆食堂に来ていた。

「食いすぎだろ！」

「そう言われましても、まだ10分の1も燃料補給できてませんよ」

きよとんとした顔で答える。

すでに日替わり定食の大盛りを五人前も食べている。

もちろん僕は水だ。お金がないから。

家で自炊でも良かったのだが、彼女にとってはじめての食事ということもあって奮発した。

「どれだけ食うんだよ！もう、お金ないよ！」

「あと、お願いがあるんですけど」

「なに？」

まだ、他に何かあるのか。

「服が欲しい」

「着てるじゃん!？」

「これ一着しか持ってないんです」

彼女の格好は、体にフィットした襟のある黒い上着に、同じ色のズボンとブーツ。

この国の軍人が着ているものと酷似している。

一緒に歩くと少々目立つ格好だった。

「はあ……」

それにしても金かかり過ぎだろ。

僕は賞金首リストの張り紙を見ていた。

少々お金のかかる武器を手に入れてしまったので、何とかならな

いか考えているところなのだ。

「あんまり目ぼしいのないな」
僕は簡単で手っ取り早く儲かる夢のような仕事を探していた。
だがそんな都合のいいものがあるわけない。人生はそんなに甘くないのだろう。

「ちょっとあんた、どっかで見たことあるね。有名人かい？」
後ろを振り返ると、僕の連れである【キラーオメガ】がオバちゃんに話しかけられていた。

オバちゃん、それは機械だ。有名人ではないんだよ。
パツと見は解らないけど。

彼女は、
「有名人ではありません」と返答する。

「どっかで見たことあるんだけどねえ」
しつこく食い下がるオバちゃん。そして、思案顔になった。

「そうですか」
それをそっけない返事で返す。

「そうだよ。ん……、あッ！？わかった！あれだよ。あれ」
と周りの迷惑を気にしないような大声で叫ぶオバちゃんは、壁にかけられた絵を指差す。

指差された先には、【ルシール・ザスカイ】の絵が飾ってあった。
20年ほど前に活躍した冒険者。勇者一族にして、天使の血を引いた正真正銘のサラブレッド。

光術系の魔法を得意とした。

魔女殺し。女性。

ちなみにこの部屋には、歴代の勇者、賞金稼ぎの肖像画が飾られている。

その絵を見ると確かにそっくりだ、生き写しといってもいいかもしれない。

機械に生き写しと言つのはおかしいかもしれないけど。もしかしたら、彼女はルシールの姿をモデルとして造られたのだろうか。

オバちゃんは、『そっくりな人がいるもんだね』と言いながら去っていった。

「そうだ名前まだ決めてなかったよな」

僕が【キラーオメガ】に話しかけると、

「はい」と短く答える。

「あの絵を見て思いついたんだけど、ルシールにしようよ。顔もそっくりだし」

「わかりました。では【ルシール】で登録いたします」

「愛称はルーシーね」

「わかりました」

・【ルシール】

>自動操縦システム<

呼び出した者が指示を出さなくても、自動的に戦闘を行う。その代償として細かい指示は出せない。

>ホーリーベル<

光の矢が敵を貫く。

ルシールの向いている方向に関係なく、何処にでも攻撃が可能。

> 真実の鏡<

光の玉により魔法をガード。

玉、一個につき一つの術を防ぐ。

> 死刑宣告<

触った相手の頭に天使の輪を取り付ける。

天使の輪は、30秒後に爆発。

> 魔女に断罪を<

。

・ルーシー

+++

「教会の建設現場を手伝う仕事ならあるよ」「
酒場の隅にある、カウンターで老婆にそう言われた。
この場所は冒険者に仕事を紹介しているのだ。」

「あんまり冒険者っぽくない依頼だなあ……」

「隣町から北上100キロのところにいる魔女討伐つてのもある
けど、どっちが良い？」

「建設現場のほうで
即答だった。」

モンスターに光の矢が突き刺さると共に、すさまじい爆発音と衝
撃波が巻き起こる。

「おい！洞窟でホーリベルを使うな！」

魔法の威力が強すぎて崩落する。
岩に潰されて僕が死んでしまう。

「わかりました」

僕は洞窟を探索する仕事を請け負っていた。

「おかしい、働けば働くほど貧乏になっていく……」

元々赤字だった家計がヤバイことになっている。

いろいろ働いているのにお金がない。

僕の稼ぎが悪いせいだ。そして、燃費の悪い武器のせいだ。

稼いでは食費、いや燃料代といった方がいかもしれない。そ

れに消えていった。

待機状態でも腹は減るらしい、動かなくても食べる。動けばさらに食べる。

悪循環だ。

そして、僕はさらなる出費の危機に立たされていた。

「この服じゃ嫌です」

僕らは、服を買いに来ていたのだ。

人にしか見えない武器のルーシーの要望で。

「どんなのがいいの？」

「もつとかかわいいの」

着ればいいわけではないのか……よくわからん。

「じゃあ、他の店にも行ってみようか？」

「はい」

僕らは町の中心街にある、魔法使い用のローブを取り扱っている専門店に行った。

さすが専門店だけあってすばらしい品揃えだ。
ものすごく高い値段の物から普通に高い物、そしてちょっと高い物、……ていうか普通と安い物がない。

それを見てルーシーは、

「なかなか良い物が揃っていますね」と話す。

それはそうだろ。これだけ高いのだ、物が良くないと困る。

「あまり高いモノ選ばないでね」

「これなんてどうですかね？」

ルーシーが選んだのは、黒い生地をベースに濃紺の紐でフチ取りされた、肩がすっぽりと隠れるローブ。

スカートは短く、胸には金糸が編みこまれていたりボンが付いている。

どう見ても、実用性を完璧に無視したデザイン。

もちろん値段は高い。防御力が高いからではない、デザインが凝ってるからだ。

(……人の話聞いてねえ)

「それもいいけど、こっちのほうが良くない？」

「いや」

僕はもつと戦闘で使えそうな防御力が高くて、もうちょい安いのをすすめたがルーシーに断られる。

> 魔導師のローブ ブルーアイランド製くを購入。

ルーシーは防御力が下がった。

+++

辺境にあるこの町は国の役人などめつたに出来ない、けれども一年に一回、査察が目的でこの町に何日か駐留することがある。

今日はその日だった。町に来た王立騎士団は十人ほど。

白色をベースにした鎧には赤い十字架が刻まれており、足には聖騎士の証である金色の拍車がつけられていた。

団長はえらく小柄な男性。身長と同じぐらいの全長の長い小銃を所持。

騎士団だけど銃を持っている。

僕とルーシーが酒場で昼食をとっていると、その騎士団と見知らぬ中年の男が争いだした。

どうやらその男が、王立騎士団に向かいケンカをふっかけたらしい。

のんびりとしたお昼には相応しくない、怒号が店内に響いている。やがて争いになり、怒号が大きくなり、殴打の音が聞こえはじめ、最終的に逆らった男は、床の上にボロ雑巾のごとく打ち捨てられていた。

白い鎧には、赤い返り血。

「吊るし首だ！」

騎士団の中で比較的若い人がそう叫ぶ。

僕らと店の客は見てみぬフリをしている。

騎士団に逆らうものなど誰もいない。みんな巻き添えを食らうのなんてゴメンだった。

この後、あの男は吊るし首になるだろう。

王国直轄の騎士団に逆らったため。

それを見ていたルーシーは僕にこう言った。

「助けられないんですか？」

「どうしようもできないよ。騎士団に逆らうってことは、国に逆らうってことだから」

「軍人に死ねって言われたら、死ぬんですか？」

「言ってる意味はわかる。けれど人間どうしようもないことはあるもんだ。」

「死なないけど、僕らにとっては死ぬって選択肢しか無くなるから。最終的には死ぬことになるかもね」

「仕方ないから見殺しにする。仕方ないからあきらめて死ぬ。人間はなんで生きているんですかね」

ルーシーはそう言った。

「みんな納得しているよ。あの男が悪いつてね」

騎士団に逆らったと言うことは、国に逆らったと言うこと。

逆らった者をそのまま生かしておいたら、国の威信に関わる。

僕に言わせてもらえば国の役人、ましてやプライドの高い王立騎士団にケンカをふっかけるなんて殺してくれって言ってるようなもんだ。

「言い争っただけで殺されるんですか？」

「しょうがないだろ。僕らは国に生かされている。逆らったヤツがバカなのさ」

確かに吊るし首にされるほどのことじゃないかもしれない。けど今の時代、国に逆らったら生きていけない。

「バカだと死なないといけないんですね」

「そんなこと言っていない」

「だって仕方ないから見殺しにするって言ってるじゃないですか」

「何と言われようがかまわないけど、僕は助けられないぜ」

賞金首ハンターではなく、自分が賞金首になってしまう。

そんなのはゴメンだ。

きれいなことだけでは生きていけない。

気に入らないことにすべて逆らってたら命がいくつあっても足りない。

僕は、何もせずにその店を後にした。

その夜、僕が住んでいる大家のバアさんから呼び出された。

「どうしました？」

今月の家賃は、もう払っているはずだ。

「冒険者のあなたに頼みたいことがあるんだ」

「いや、ちよつと今月は忙しくて……」

この間、りんごとウサギをとってくる仕事をさせられた。

ちなみにその時は、ただ働きだった。それ以来このバアさんからの依頼は受けないことにしている。

返答を聞いてもバアさんは話し続ける。僕の言葉なんて聞こえてないかのようだ。

「今日の昼間、うちのバカ息子が国の騎士団に逆らったらしいんだ……」

「……………」

昼間、酒場で見かけた男だ。大家さんの息子だったのか。

「それを助けて欲しい欲しいんだよ…………」。自警団に言っても聞いてくれないんだ。残念だけど…………あきらめるしかないって言うんだ

…………。もうどうしようもないらしいんだ」

大家さんは涙ながらに語りだした。

「……………」

「無理な頼みごとだってことは、じゅうじゅう承知しているんだ…………あんたしか頼める人がいないんだよう…………うっ」

何の力や実績のない僕に頼んでくるなんて、ワラにもすがる思いなのだろう。

「……………」

「この通りだ。うう…………、うう。なんとかお願いします」
膝を折り床に頭を擦り付けて、泣きながら僕に頼む。

「……………」

「……………お願いします、う。ううう、お願いします……………ます。……………おねがい……………します。うう……………」

・ 大家さんの息子

名前はラウデイス。

僕が今から助けに行く人の名前。

自警団の建物、地下一階の牢獄に監禁されている。

(……………機械人形相手に何をやっているんだろう)

僕は、大家さんの息子を助けるための作戦を練っていた。

ルーシーに説明するが、機会は僕の自殺行為を止めてくれない。

ただ、従順に説明を聞き実行するだけだった。

「正面突破する」

明日になれば、ラウデイスは縛り首にされるだろう。

そうなる前に助け出したかった。

他の作戦も、色々考えたが良い案は一つも思いつかなかった。

ラウデイスが捕まっている場所に忍び込むのは不可能。

縛り首になる直前に助けるのも無理。助ける前に、僕が騎士団に殺されてしまうから。

残ったのは、【ルーシー】を使った特攻のみ。

「相手が油断しているスキに>ホーリーベルくを使って、自警団の建物をぶつ壊す」

>ホーリーベルく

光の矢が敵を貫く。

ルシールの向いている方向に関係なく、何処にでも攻撃が可能。

ルーシーは僕の話に黙って頷いた。

こんな辺境にある田舎町じゃ、牢獄なんて物騒なモノがあるのはこの町を守るための自警団の建物くらいだ。

今回はソレが逆に幸いした。ラウデイスはそこに捕まっているらしい。

王立騎士団はそんな貧乏臭い所にいない。確認した所、街中の高級ホテルに宿泊している。

戦闘力の高い、王立騎士団とのやりあいは避けなければいけない。勝てるはずがないと思っっているから。

この町は小さいから国の軍隊は駐留していない。だから町を守るために自発的に民衆が集まってできたのが自警団だ。

そんなものいくら手だれの冒険者が集まっても、所詮、烏合の衆。連携なんてものはそんなに期待できないし、装備もそれなり、建物の設備はお粗末だと言える。

あくまで国によって組織された軍隊に比べればと言う話だけど。

やってみないとわからないが、僕でも付け入る隙があるはずだ。

夜に奇襲をかける予定。

夜になった。月が無い。最高の奇襲日だ。

自警団の建物は町外れにあった。

外からこの町に入ってくる時、一番最初に通る道の近く。

石でできた二階建ての建物、地下は一階だけ。

そこに牢獄がある。

防衛上の理由により入り口は一個、そこには門番が一人だけ。

昼間は比較的自由に出入りできるが、日が落ちてからは関係者以外入ることができない。

（昼間のうちに進入しておくって手もあったか……）

そんなことを思ったが、バアさんに頼まれたのは夜だったからそれは無理。

やっぱり戦闘用機械のルーシー【ルシール】を使って正面からお邪魔するしかないんだ。

何でこんなことをするハメになったのだろう。

もしかしたら、ルーシーという力を持っていなければこんなことにならなかったらどうか。

いや、それ以前にしかつりとした自制心を持っていればこんなことにならなかったらどうか。

なんて慣れないことを考えていたら、僕は声をかけられた。

・大家さんの息子 救出作戦

+++

「こんにちは！というよりこんばんわかしら？」

「次にあった時は、殺される時だとは思わなかったんだな。フィ
ウォン・レイニー」

彼女は、一番最初に会ったときの格好でここにいた。白いローブ
に、赤い文字でのフチ取り。

いや、違うトコロがあった。手につけていた腕輪がない。

> 虐待を受けた少女の腕輪くを持っていなかった。

持っているわけないのだけれど。

僕が他人にあげたから。

あたりは暗く背中についているフードをかぶっているため、顔は
見えない。

そして、後ろから僕に話しかけた。

でも耳に引つかかるような幼くて甘ったるい声でわかる。

こんな話し方するやつは、僕は他に知らない。

「こんなところで何をしているの？」

「こつちの科白だ！よく僕の前に平気で顔を出せるな」

こんな所であまり大きな声は出せない。でも、いやでも怒りで声
のトーンが大きくなる。

「なんで？」

「……お前には、二回ほど殺されそうになった」

エルフの少年を助けようとした時。

鉄の騎士団とやりあった時。

フィウは、含み笑いをして、

「すごいわね。それでも生きている。ゴキブリ並みの生命力だね」と言う。

どうやら僕を殺そうとした自覚があるようだ。

「とりあえずお前の相手は今度だ。今日は忙しい」

「あはは。そんなこと言わずに、わたしといやらしいことしようよ」

そんなことは無視。

「なんでこんな場所にいるんだ？」

「内緒」

とささやくような声で僕に話しかける。

「じゃあ、話はここまでだ」

僕は忙しい、こんな女にかまっている暇はないのだ。

「この間のお詫びに、よかったら協力してあげようか……」

「……僕が何するのか知ってるのか？」

「知らない。でもなんかするんでしょう。いい加減、厄介ことに首突っ込むのやめないと死んじゃうよ」

「……………」

死にそうになってる半分は、お前が原因だけだな。

けれども、フィウがいれば話は簡単になる。

こいつは、姿が消せる。そうすれば自警団の建物に進入することは楽勝。

なんでこんな所にいるかわからないが、利用しない手はない。こんなヤツの手を借りるのは不本意だけれど。

今回は、僕が利用される心配はないだろう。

たぶん……。

フィウの魔法で姿を消し、建物に侵入した。

玄関を通り、一階奥の階段を地下に向けて降りて行く。

やけに重い扉を開け牢獄がある部屋に入ると、大家さんの息子であるラウデイスがいる。

牢屋に入っている。

ボコボコになって息も絶え絶え。

おそらく拷問されたのであろう。でも、生きている。

まあ、死んでしまったら吊るし首にできないから手加減されたのだろうか。

牢をぶち破るために、ルーシーに声をかけようとした。彼女のばか力で壊してもらおうとしたのだ。

でも

「……………捕まえた」

女の声が聞こえた。

しまった!?

誰かに見つかったか、

僕は焦り後ろを振り向くが、誰もいない。

フィウとルーシーはいるが、二人はいて当然だ。

でもまだ話は続く。

「油断しましたね魔女」

その声を聞いてフィウは、

「ちよっと何言ってるのあなた？」と言った。

そこでは、フィウのことを後ろから羽交い絞めにするルーシーの姿があった。

「なにやっているんだ！ルーシー！」

「

僕が質問しても何も答えない。

「……………アガッ」

ミシミシとフィウの体が締め付けられる音が聞こえる。

「さあ、魔女狩りの始まりです」

ルーシーにかけられた罫が発動。

> 魔女に断罪を<

魔女と遭遇した際に自動的に攻撃する。

魔女にのみ使用可能。ちなみに発動を抑えることはできない。

ルーシーは>死刑宣告<を使った。

> 死刑宣告<

触った相手に天使の輪を取り付ける。

天使の輪は、30秒後に爆発。

フィウの頭に天使の輪が取り付けられた。

「こいつ……………」

フィウは、締め付けられて動けない。

ルーシーを振りほどこうとするが、力が強すぎて取ることができなかつた。

痛みでフィウの集中力が切れ、姿を消していた魔法の効果が切れる。

「ルーシー！こんな時に何やってるんだ！」

こんなことやっていたら、自警団の建物に侵入したことがばれてしまう

しかし、僕の声はルーシーに全く聞こえていない。

どうしたらいいんだ。

ルーシーはさらに締め付ける力を強めたらしく、フィウの腕の骨、背骨や、筋肉と神経が折れて、千切れる音がした。

みしみし、ぎりぎり、ブチッ。

耳をふさぎたくなるような悲惨な音と、フィウの声にならない悲鳴。

僕はどうすることもできない。

そんなやり取りをしていると、

やがてフィウの存在が、虚ろになったような気がした。

さっきみたいに透明になったせいで、存在感が薄れたわけではない。

体が石のように固まり、ひびが入る。そして、ボロボロと脆い砂のように崩れ、サラサラと赤黒い砂のような姿になって床に積もる。生命力が急激に失われていくような気がした。

「うわぁ　ッ!?」

死んじゃった。

始の魔女のあっけない最後。不意をつかれて倒された。

こんな奴、死んだほうが良いと思っていたが本当にやられるとは

思わなかった。

ていうかここから脱出するときどうするんだよ……。
なんてことを考えていたら、何処からか

「どうやら、私のことを見つけると自動的に攻撃されるように設定されていたようですね」

死んだはずのフィウの声が聞こえる。

「ギャッ」

いきなり化けて出てきたのか。
洒落になってない。

「」

ルーシーの戦闘体勢はとかれていない。

彼女の視線を追うと、砂が動き出す。時間が巻き戻されたように、
だんだんと砂が人の形を取り戻していく。
いっしまとわぬ姿のフィウが現れた。

「死んだわけではなかったのか……」

服を着ていない代わりに、体には赤い文字が刻まれていた。
両方の手首には、まるで赤い文字で造られた腕輪のように。
太ももの部分にも、赤い刺青のように。
首のところには、まるで首輪のように。
へそから胸にかけて、赤い十字架のように。

そして、頭には天使の輪に模した時限爆弾が取り付けられている。

ルーシーにかけられた呪いは、砂になっても消えていない。
紅い目は閉じられたままだ。

「よくもわたしを殺そうとしたくれたね
フィウの閉じられた目が開く

お前のことも殺してやるよ」

死んだ人間が地獄から叫ぶような声。

それを聞いた人間は、魂が凍ってしまうかもしれない。
正直、僕は身動きが取れなかった。

彼女のまぶたが開き、黒い眼球には血の色の瞳。

(……………超怖え)

僕は、部屋の隅でガタガタ震えていると、

二人は臨戦態勢に入る。

もはや、止めることができない。近づく者は殺される雰囲気。
無言のプレッシャー。

まず始めにフィウが魔法を使った。

【夕暮れに沈む太陽】

ひとりの人間をすぽり覆えるような大きさの赤い球体が、
ルーシーの頭上に現れ、襲いかかる。

ルーシーの周りには、光の玉が浮かび上がった。

赤い球体の軌道を強制的に変更。弾かれた赤い玉は地面にめり込
んでいく。

赤い玉は何処までも沈んでいった。

ルーシーは、光の矢で攻撃。

フィウの体に突き刺さり、体が焼けた時の臭いが部屋に漂う。

二人の戦闘により部屋が壊れ壁が崩れ始める。このままだと、生き埋めになるのも時間の問題だろう。

ルーシーの横に開いた底の見えない穴からは、不気味な声のようなものが聞こえた。

深すぎる穴に吹き込む、ただの風の音だと思う。

でも、もしかしたら地獄に続いているのではないか。そんなことを考えてしまうほど深い……。

ルーシーは僕の命令を受け付けない。

制御不能。

フィウは、何を考えているかわからない。その前にルーシーと戦闘している彼女には、考える余裕なんて無いのかもしれない。

なにせよ声をかけられるような雰囲気ではなかった。

僕にはこの状況、どうしようもない。手の出しようがないのだ。

そして、

フィウの頭の上に着いていた【天使の輪】が、制限時間を超え爆発する。

派手な音と共に頭が吹っ飛び、……首から上がきれいに無くなった。

頭を失った体は、再び砂のように崩れさる。

赤い砂は、何処からとも無くふいた風により、壊れた壁の隙間から外へ出て行く。

しかし、ルーシーの戦闘体勢は解かれない。

きつとフィウはまだ生きているのだろう。

砂になって建物の外へ逃げ出したのだ。

ルーシーは、半壊した壁に光の矢を打ち込む。壁に穴が空き建物の外側が見えた。

彼女は、空けた穴から外に出て行く。きつと魔女を追いかけていったのだろう。獲物を追う猟犬のように。

魔女を殺すために造られた、機械人形。恐ろしいまでの戦闘力。僕の想像以上だ。今回の作戦には全く関係ないけど……。

そして切望的な状態は続く。これだけ壁は壊れているのに、鉄でできた牢はほとんど壊れていない。

最初の目的であるラウデイスの救出は不可能。

部屋の外側から、何かをやりとりする声が聞こえてくる。この騒ぎを聞いた自警団がこちらに向かってきてきているはずだ。

(これだけ派手にやったんだ気づかれないほうがおかしい……) このままでは僕も捕まってしまう。

壁に空けられた穴から僕は逃げ出した。

大家さんの息子の救出。失敗。

・大家さんの息子 救出作戦 2

+++

僕は大家さんと町の中央にある大広場に来ていた。

この場所で、お昼の鐘がなると共に大家さんの息子が処刑される予定。

「うつつ……うつつ……」

大家さんはさっきから泣きっぱなしだった。

昨日の深夜、救助失敗したことを告げると

お礼を言われた。

文句を言われたわけではないし、失敗したことに對して叱責されたわけでもない。

ただ『ありがとう』と言われた。

最後は『もういい。バカ息子は自業自得だ、あきらめがついた』
と言っていたけど……やはりつらいのだろう。

息子が吊るし首にされるこの場所は見ないほうがいいと僕は提案したが、

「最後は見届けてやりたい」と言われた。

そして僕に「一人だと息子の最後を見届けることができないので一緒にいて欲しい」と頼んできた。

肉親が吊るし首の刑に処される瞬間を見届けることなんてできるのだろうか。

僕には、そんなことできない。

大家さんはきつと強い人なんだろう。きつと自分がここにいて

とで息子を安心させて、天国に送り出してやるつもりなのかもしれない。

でも、こんなことでいいのか。

大きな力には逆らうことができない 例え間違っていてても。

大広場では、吊るし首にするための準備が着々と進んでいる。

「……………」

(……) やっぱり息子さんが死ぬところは見ない方がいい() と言おうとしたが口は開かない。

僕は何もできずただ突っ立てるだけだった。

今は奥の手もない。

一番攻撃力があるルーシーは、フィウのことを追いかけていったまま、昨日から帰ってきていないのだ。

そんなことを考えていると、

「ちよつと！」

後ろから声がある、振り返るとフィウがいた。

手には全く動かなくなった、ルーシーがつかまれている。

自分の体より大きなルーシーを、引きずるようにして持ってきたようだ。

「壊したのかッ!？」

「燃料切れよ！」

ルーシーを投げ捨てるように僕へと渡す。フィウの服はどういうわけだか元に戻っていた。

昨日会った時に着ていた白いローブだ。

「ふッ。また壊されたのかと思ったよ」

ひとまず安心して、とりあえず動かなくなったルーシーを腕輪に
しまう。

【ルシール】を腕輪に戻した。

「なによ？またって！……てゆうかその前にこっちが殺されそう
だったわ！」

フィウに文句を言われる。

「わるい、わるい。こっちだつていきなり襲い掛かるとは思わな
かったし。でも、よくルーシーを止められたな」

「だから燃料切れだよ。持ち主が貧乏人で助かったわ……」
「なるほど」

僕はいつもお金がないので、ルーシーに腹いっぱい食事を食べさ
せる。もとい燃料を満タンにすることはない。

なので戦闘の途中、燃料切れで止まってしまったのか。

「ところで……あそこにいるのが昨日助けようとした人なの？」
フィウは絞首台を見つめている。

「そうだよ。もうどうすることもできないけどね」
絞首台の周りには、王立騎士団。

戦いを挑んでも勝てる見込みはなし。

でもフィウは泣いている大家さんをちらつと見て、

「なんとかしてあげようか？」と言った。

「できるのかよ？」

今回は公衆の面前だ。透明になれば良いってわけじゃない。

「どうしよっかな」

何処か僕をバカにしたような面持ち、横目で僕をじらす。

「できれば助けてやりたいんだけど」

大家さんのためにも。

「ふーん」

品物を見定めるかのような目つきで僕を見つめる。

「……………」

「……………いいよ。でも条件があるわ」

フィウの幼い顔が、意地悪く笑った。

「どんな？」

魔女との取引、どれだけ僕にとってマイナスな条件が提示されるのだろう。

「それは後で話すね。今は時間が無いよ」

「わかった」

後で話すってことは、僕はどんな条件でも飲まないといけなくなる。

そんな後だしの条件提示、ロクでもないものに決まってるし、今回の件と釣り合わない取引になるかもしれない。

それでも、受けよう。命にはかえられない

「ふふ〜」

猫のような顔で笑う。

「で、どうやって助けるの？」

「そうね。では少し手伝ってもらおうかしら……………」

「で、なにを手伝えれば良い？」

一度は失敗した大家さんの息子、ラウデイスの救出。

僕はフィウに協力してもらって、最後にもう一回だけ作戦を実行することにした。

「ここにいる人達、全員の目を一瞬だけそらして欲しいの」
「目をそらすって……何するんだよ？」

「その間にタネを仕掛ける。手品にはタネが必要でしょ？」

「タネねえ。まあそれはいいけど、そんなこと、どうやれば……」

「それは任せるわ。一瞬で良いから」

「……………」

簡単に言うけど、王立騎士団と見物人の注目をそらすことは、相当難しいと思う。

人の注目をあるめるためには、今現在ある目の前の出来事よりも、より人々の興味を引く内容を提示しなくてはならない。

死刑囚に集まっている視線をそらす？

よっほどのことをやらないと無理だろ……。

「じゃあ、よろしくね〜」と言って、

姿が景色に溶け込む。

フィウは、魔法によって姿を消してしまった。

「ちょっ……………」

そんなこといきなり言われてもできない。と言おうとしたが、彼女はもういなくなってしまった後だった。

僕の頭は良くない。むしろ悪い方だ。出来の悪い頭は何も思いつかない。

しかし、とりあえず何かやらないといけないんだ。
こうなったら、

「うおおお

ッ！！」

僕は叫んだ。出来る限り、腹から声を出して。

何人かこちらを見たが、注目は集まらない。

失敗だ。

さらに、

「みなさ

ん！僕の話聞いてえッ

くださあいい！

」

大きな声を出したが、誰も振り向かない。

もう駄目だ。僕力なんてこんなもんだ。

ていうかどうしよう。

僕がオロオロしていると、

僕らの後ろに植えてあった木に、赤い雷が落ちる。

バチツバチイと激しい電撃の音。

(フィウの仕業だ)

赤い雷が木を焼き尽くす。

燃え盛る木は崩れ落ち、人々の注目を集めた。

人々の視線が、絞首台から一瞬だけそれる

(チツ、役たたず)

フィウの舌打ちと、文句が聞こえてきたような気がした。

やがて人の視線は、広場の真ん中にある絞首台に戻る。

大家さんの息子、ラウデイスの首には縄がかけられ今にも死刑執行されようとしていた。

「ああ、フィウは間に合わなかったんだ……」
僕は絶望する。

広場で木が燃えようと関係ない。死刑は執行される。

そして、ラウデイスの立っている台の床が取り外されると 彼の体が重力に引っ張られ、首に縄がめり込む。

死刑が執行された。

大家さんはそれを見て泣き崩れる。

僕は呆然と立ち尽くした。

「速めに逃げたほうが良いよ。今、あそこで吊るし首になっているの王立騎士団の一人だから」

いきなり後ろからフィウに話しかけられた。

「うわッ……」

僕はびっくりして声をあげた。

「速く！ さっさとその人も連れて逃げるの！」

大家さんのことだ。反応がない、ショックで気絶してしまっている。

「逃げる？」

彼女が何を言っているのかが解らなかった。

そんな様子を見て、フィウが僕に説明する。

「ターゲットと王立騎士団のメンバーをすり替えてきたのよ」

「どうやって？」

「透明になる魔術の応用。そもそも、人間の目が捕らえている映像を改ざんするのがこの魔法だから」

「じゃあ、あそこで死んでいるのはラウデイスじゃないのか」

僕が見ているのは、フィウによって変更された嘘の映像。

「だからそう言っているでしょ！ あそこにいるのは騎士団員」

フィウはそう言つと　いきなりラウデイスの姿が現れ、投げつけた。

僕は彼を受け止める。

「……なにも王立騎士団を殺さなくても」

取り返すつかなないことをしてしまった。これで完璧に国を敵に回したことになる。

僕の言葉を聞いてフィウは不機嫌になった。

「なに、ビビッているの？近くにいたのが彼らだけだったし。そもそも、その言い方だと全く関係ない人間を殺した方が良かったのかしら？」

「違う！人を殺す必要がないだろ！」

「何言ってるの。おとりがないと逃げられないよ。私の魔法で変えられるのは人の認識だけだし」

そうか……。

ラウデイスがいきなりいなくなったら大騒ぎになって、今すぐにも追っ手がかかる。

この広場は閉鎖され、僕らは逃げられなくなる。

「……………」

「これが魔女にモノを頼むってこと　いや、魔女に頼まなくてもきつとそうなんだよ。何か得るってことは、何かを無くすこと」
呆然と立ちつくす僕を見てフィウは言った。

「わかってる」

今回はラウデイスの命を助ける代わりに、王立騎士団を敵に回したんだ。

フィウの話は続いた。

「わかってないわ。単純な例えだと、私たちが生きて行くためには何が必要だと思う？」

「他の生き物の命だろ」

その答えを聞いてフィウはため息をつく。

「違う、時間だよ。生きている限り時間は過ぎてゆく、止まらない、思考するにも、食事をするにも、睡眠することにだって　い

やでも時間は過ぎていく、買うこともできない、もちろん売ること
も、強制的に時間を犠牲にすることで人生は成り立ってる」

「要するに、何も犠牲にしないで誰かを助けたいなんて、きれい
ごとと言っただけのことか……」

何か危険なことをすることで、それに見合ったりリスクが強制的に
発生する。

犠牲なしでは何も出来ない。

「ちよつと違っただけだね。どんなに汚いことを嫌がってもリ
スクや悲しいこと、辛いことはセットで付いてくるってことなんだ
よ」

「違っのかよ」

まあ、いいや。今は逃げることに専念しよう。

・大家さんの息子 救出作戦 終了

+++

「今頃、街中は大騒ぎになってるねッ！」
フィウは僕の顔を見て、ニコツと笑った。

「そりゃあ、国に所属している騎士団のメンバーが殺されたとあっては、大騒ぎにならないほうがおかしいよ」
下手したらこの町はなくなるかもしれない。やっきなって犯人探しをするはずだ。

探される側の大家さんと死にかけた息子さんは、フィウに逃亡専門の業者を紹介してもらっていた。

【逃がし屋】

犯罪者、逃亡者、亡命者の逃走を助ける専門の業者。
逃がす際に、依頼人の財産をすべて買い取る。
金額に応じて、逃がす場所が決定する。
高額の場合は南国のリゾートアイランド、低額だった場合は炭鉱などになる。

ちなみに買い取る金額はそれなりで、足元を見られることが多い。
「……これで良かったのかな？」
これからの人生、あの親子は犯罪者として生きていくことになる。
明るい道を堂々と歩く機会は、もうないかもしれない。

「命あつてのモノダネ。あのお婆ちゃんもお礼言ってたし、きつと良かったんだよ」

「そうだね。……………ていうか僕も追われることになるのかな」
大家さんと一緒にあの広場にいたし。
ラウデイス背負ってあの場所から、逃げてたし。

「それは大丈夫だと思うよ。お兄さんのことなんか誰も気にしてないし」

フィウは、サラッと僕の心が傷つくことを言う。
でも、本当にそうだろうか

「あれだけのことをしたんだ。そうは思えない」

確かに見物人の目は絞首台に釘付けになって僕らのことを見ている人間なんて一人もいなかった。

それでも、誰かに見られていたんじゃないかって気になる。
人助けとはいえ、悪いことをしたんだから。

フィウは言葉を続ける。

「そんなのただの疑心暗鬼。勘違い。もしかしたらお兄さんは悪いことをしたら見つかってしまうとか、天罰が落ちるとか殊勝な考えを持っているのかもしれないけど、大抵の場合はそうはならない」
「そんなことないだろ。やっぱり悪いことをしたら、それなりの報いがあるんじゃないのかな？」

その言い方だと、まじめにやっている人がバカみたいだ。

「そんなのは被害者の詭弁だね。例えば『あいつは悪いことをしているから、いつか痛い目を見る』とか『悪は正義に裁かれる』なんて言われてるけど、そんなの『あいつは悪人だから、痛い目にあうといいな』『正義の味方にさばかれるといいな』っていう本人の希望だよ。結局の所自分で裁かないと、悪人なんていなくならないんだ」

「そうかもしれないけど……………」

言ってることはわかる。
しかし、子供みたいな外見で言われると驚くほど説得力が無かつた。

「まあ、そうは言ってもこの町が危険なことに変りないからこのまま旅に出ようよ。運が悪ければ、王立騎士団に殺されちゃうよ」「フィウは飽きたらしく、会話をぶった切った。

「それが良いかもしれないね」
僕もそれに同意する。

「じゃあ、このまま出発！お兄さんの家に戻る時間はないよ」
「大丈夫だ」

幸い超のつく貧乏人なので、旅に出るため家から持ってくるモノは何もないのだから。

僕とフィウは食堂にいた。

旅の途中の休憩と食事をかねて。

「それでは、交換条件の発表です！」
うれしそうに話す姿は、まるで子供のようだ。

「あー……」

確かにあったそんな話しが。

大家さんの息子を助けるために出された交換条件。

でも、よくよく考えてみたら大家さんのためにはなっていない、僕は何も得がなく、むしろ痛い目にしかあつてないので、そんな約束ぶつちぎっちゃっても良いのではないか。

なんてことを考えていると、見透かしたかのようにフィウが笑う。
悪魔のように。

いやらしく。

「約束を破つたら、契約破棄とみなして助けた人達を殺す。そして、お兄さんは私の使い魔として働いてもらう。奴隷のように、そして家畜のようにいっぱい調教してあげる。わたしの躰は厳しいわよ……」

「何言ってるんだ！破るわけないだろ。こう見えても僕は、約束を破らない義理堅い男として町では有名だったんだ」

(……ヒイツ。超怖い)

ちなみに前にいた町に知り合いなんか数えるほどしかいないので、言ったことは嘘である。

「約束を破らない。そんなこという人間が一番、信用できないんだけどね。ウフフ」

「ご名答だ。」

完全にスイッチが入ってしまったフィウは、獲物を見さだめるように僕を見る。

「ところで交換条件ってなに？」

話題を変えよう。

「ふふ、話題を変えたね。いいよ、話してあげる」

「それはどうも」

「この前に、二人で【エルフの少年】を助けに行ったこと覚えている？」

「覚えているよ」

「ていうか忘れるわけねーだろ。」

「こっちは死にかけたのだ。」

しかし、そのことを思い出してみると、あの時の借りは返してもらっていないので、今回大家さんを助けた件とチャラってことでは良いのではないか。

なんてことを考えてると、

「駄目だよ。あの件と今回の件は別だよ」と言う。

「……………」

(こいつ、魔法で僕の心の中を見透かしてるのか)

「見透かしてないよ」

「見透かしてるだろッ!？」

サラッと言うにフィウ対して突っ込む。

「お兄さん。わかりやす過ぎ、全部顔に出てる」

「まじっすか……………」

自分の駄目さ加減にびっくりだ。

「でも、どうしても言うなら……………その件は体で払ってあげる。わたしの子供みたいな体……………一晩中好きにしていよいよ……………」

そう言うって、両手で白いローブを胸元までたくし上げる。

「いや、遠慮しておきます」

なんか呪われそうだ。

「つれないな……。まあ、いいわ、冗談はこれくらいにして本題に入りましょ」

「そうだな。それで僕にやってほしいことってなんなの?」

「エルフ族と戦って欲しいの」

・VS 王立騎士団

+++

「お話中失礼いたします。ちょっとよろしいですか？」

フィウが本題を切り出したところで、妙な横槍が入った。

その男は普通の布の服に、よくある目立たない色のズボンをはいている。

「なんででしょう？」

僕がそう切り出すと、男は名刺を出してきた。

そこには、

『王立騎士団所属 探偵 ナツシュ・ガールント』と書いてある。

「！？」

こんなに速く居場所を突き止められたのか。

僕らが王立騎士団を殺したことがばれてしまったのか不安になる。

僕は驚いて、席を立ててしまいそうになったが フィウは全く

動じない。

そんな感じで、

「私たちに何か御用でしょうか？」と切り返した。

男がご一緒してよろしいですか？と尋ねると、フィウはイスを差し出す。

「実はワタクシ、この町に着たばかりですね。このお店は何

「がおいしいのでしょうか？」

男がそんな質問をしてくると、

「さあ？わたしもこのお店に来るのは初めてなんです。よくわかりません」と言った。

「おお、奇遇ですね。もしかしたら旅の途中ですか？何処から来たんですか？」

探偵と名のる男、ナッシュ・ガラントは矢継ぎ早に僕らに質問する。

「そうですね。隣町です」

フィウは、短くそう答えた。

「いやー、ますます奇遇だ！実は僕も隣町から来たんですよ」

「本当に奇遇ですこと……」

「ところで知っていますか？実は大きな声では言えないのですけど……王立騎士団のメンバーが殺されてしまったんですよ。それについて、なにかご存知ありませんか？」

「さあ、聞いたことありません。ところで名誉ある王家に使える騎士団が、そんなへまをペラペラ話してしまっているのですか？名前に傷がつきますよ」

フィウはさも知らん振りをして平然と会話しているが、僕は気が気でなかった。

僕らが殺したことを気づいているのではないか、この店の周りはずでに包囲されているのではないか。

もしそんなことになったら、チェックメイトだ。

探偵は、さっきの質問に対し一瞬間を取り、こんな風に答えた。

「……大丈夫ですよ。賞金首にバレても、なぐんにも支障はありません。ねえ、【始の魔女】さん。ところでアナタ姿消せるらしい

じゃないですか？そんなの反則ですよー」

その言葉を聞いて確信した。姿を消して死刑囚を入れ替えたことが

(……やっぱりばれてる)

フィウは立ち上がり。

「逃げるわよ！」と叫んで外に飛び出そうとする。

知らない場所で敵に遭遇した場合は、逃げるのが基本だ。

そこにどんな罠が仕掛けられているかわからないから。でも、今回はどうだろう。

確か前に王立騎士団を見た時に……

「バカ！外に出るな」と僕がフィウに言い放つ。

小銃を持っている奴がいた。そいつに外を出るところを狙われたら良的になってしまう。

でも遅かった、フィウがドアを開けた瞬間、

「えッ？」

パンッ！と乾いた破裂音がした。

一瞬、間をおいてフィウの頭に銃弾が突き刺さり、打ち抜かれた後、フィウの体は炎に包まれる。

「やっぱり狙撃された！ていうか魔弾かよッ!？」

【魔弾】

魔法が込められた弾丸。

銃弾の威力＋魔法

それを見た僕は、急いでフィウの体を店の外に蹴りだして、入り口のドアを閉めた。

もちろん意味があつての行動である。

ただ、頭の打ちぬかれた魔女を店の外に蹴り出したら悪人であるが、僕はそうではない。

彼女はあれくらいでは死なないし（一度頭が吹っ飛ばされても生きていたところを見る）、店の中にいられては、僕の武器であるルーシーを呼び出せないからそうしたのだ。

また、フィウとルーシー鉢合わせになつた拳闘同士討ちなんてことになつたら目も当てられない。

しかし、さっきの狙撃はすごかつた。

見えないところからの長距離射撃。

発射音が聞こえてから着弾まで、かなりの間があつた……。

相当遠くの場所から狙つていたはずだ。

しかも、フィウの頭を一発できれいに撃ち抜いている。

恐ろしく正確な射撃。

厄介すぎる相手だ。

「ところでアナタは逃げなくて良いんですか？」

探偵ことナツシユが僕に尋ねてきた。

「今、ここを出て行つたら的にされる」

そして、とても風通しのいい体になつてしまう。

「でも、この中にも王立騎士団のメンバーが僕の他にもいるかもしれないよ」

続けて僕に話しかける。

「そんなものいたら最初から、僕達を取り囲んでるはずだ」

「正解です。ここにいるメンバーは僕一人。でも半分、間違い」

「なに？」

何処が間違っているというのだろうか。

そのことをナツシユは説明した。

「実は、答えを言ってしまうと……あなた達が犯人かどうかは、
ついさっきまでわからなかったんですよー」

全然、悪びれない感じで僕に説明する。

「えっ？どういうこと」

だってフィウが賞金首で、姿を消せる魔法が使えるって知ってた
じゃないか。

それだけわかっていれば、十分犯人だと特定できるはずだ。

「いやいや、カマかけただけですよ。ていうか姿消すぐらいしか
方法ありませんもん。あんな大勢の民衆の目の前で、人間を入れ替
えるなんて！」

してやったりと言う顔で僕を見る。

「うっ……」

ハメられた。僕の顔から血の気が引いていく。

そんな僕を見て、さらに追い討ちをかけてきた。

「しかも、あんな大勢の人間を騙す魔法使えるのなんか【始の魔
女】位しかいませんよ。あそこら辺にいる魔法使いの中ではね」

「さすが探偵。そこらへんは、頭に入っている……いや調査済み
って訳だ」

「そういうことです」

「質問していい？」

「どうぞ」

「探偵が一人でどうやって僕を捕まえるの？この腰の剣で刺され
ちやうかもしれないぜ」

「もちろん。ちゃんと手は考えてありますよ」

そう言っ探偵は、胸のポケットから銃を取り出した。

・VS 王立騎士団の探偵

+++

・【探偵 ナツシュ・ガーラント】

職業：探偵（兼王立騎士団）

本人は探偵と言っているが国に属しているので、どちらかと言つと官憲の方が正解。

武器は小型の銃。

魔力を帯びた弾丸を撃つことができる。単発銃。

「もしかして、その銃の弾丸つて魔力帯びてる？」

「よくわかりましたね。ご明察です」

それは不味い。当たったら死んでしまう。

僕はルーシーを呼び出した。

【ルシル】が戦闘に参加した。

「ていうかアンタの仲間まだこの町に着てないでしょ？」

「何でわかつたんですか？」

「『』どうやって捕まえるの？』って聞いた時に、その銃を使うつて言ったでしょ。仲間がいたらそんなモノ使う必要ないからね」

「なるほど。油断しましたね」

と言つて銃を構える。

ルーシーの周りには、光の玉が浮遊している。
まるで星の衛星のように。

「……………」
どうするかな。

店の外の様子がわからない。

静かだ。フィウが死んでいることはないだろう。

もし、死んでいたらさつき銃を撃ってきた奴が中に入ってくるだろう。

もし、敵が複数人いたら、外がこんなに静かなわけがない。
交戦状態になっているはずだ。

い) (……………敵は目の前の自称探偵と狙撃してきた奴だけの可能性が高い)

「一応聞いておきますけど、投降する気はありますか？」

「もし、投降したらどうなるの？」

「十中八九、吊るし首になります」

「えー……………」

そんなこと言われたら、投降するわけないだろ。

「それでは、死刑執行決定！」

ナツシュは僕に向かって魔弾を撃った。

パンツ！と乾いた音がした。

それと同時に、

ルーシーの周りの光の玉が銃弾をはじく。

「オオツ！？」

予想通りだ。

魔力を帯びた銃弾は、ルーシーではじける。

「バカな!？」

ナツシユは驚き慄く。

手に持っている銃は単発式だ。

弾を入れ替えている隙に　僕は彼の足にすばやく、剣を突き刺した。

ナツシユの叫び声が聞こえる。

「その銃をこっちに渡してもらいましょつか……」

「あはは……そこにいる彼女……魔法を防げるんですね。私の計算外でした」

そう言つて、拳銃を僕の方に投げた。

【魔銃・王立騎士団の配給品】を手に入れた。

「あんまり優秀な、探偵じゃなかったてことですよ」

「手痛いコメントですねえ……殺さなくて良いんですか?」

ナツシユは力なく笑っていた。

「殺人鬼ではないんでね」

「国を敵に回したんだ……逃げられませんよ」

「……………」

その科白を聞いた後、僕は店の外を確認した。

+++

王立騎士団の探偵を倒して、店の外へ出るとフィウが立ち尽くしていた。

「どうしたの？」と尋ねると、

「わたしを狙撃した奴に逃げられちゃった」と言う。
頭はもう元に戻っていた。

しかし、前から思っていたけどフィウの体はどうなっているんだろ。

頭部を吹っ飛ばされても死なない。

もう、魔女とかエルフとか関係ないし……。

そこらへんの話聞いてみようと思ったが今度にしよう。

今は、王立騎士団の対策を立てなければいけない。

「ちよつとまずいことになったな……。これからどうする？」

まずいことと言うのは、王立騎士団に目をつけられたと言うことだ。

まだこの町に軍の本体が到着していないことは聞き出せたが、遠くないうちに来ることになるだろう。

「うーん、まいったなー」

悩むフィウ。

考えている姿が幼いなのでイマイチ緊張感がない。

「とりあえず正面からやり合ったら、負ける可能性が高い……っ
ていうか先に透明になって移動したいんですけど」

存在を忘れていたが、凄腕の狙撃主がいることを忘れていた。

フィウは頭が無くなっても平気な顔をしていられるが、僕はそんな大事なパーツを失ってしまったら、普通に死んでしまう。

— 大事だ。

「……そういえばそうね」

と言って呪文を唱える。

彼女の指先に赤い火が灯り、僕らの姿は風景に溶け込む。

僕達は、歩きながら話すことにした。

走っても仕方ないだろう。疲れるだけだ、この魔法が聞いている
うちは見つかる心配はないはずだ。

「あの狙撃主はまずそうだね」

「……200M以上離れた所から撃たれた。私が一発で死なない
とわかると、さっさとこの場所を離脱したわ」

「それだけの腕を持っているのに、ずいぶん用心深いな」

まあ、頭を打ち抜いた敵がまた起き上がってくれば用心深くもな
るか……。

「後何発か撃ってくれば、銃弾が来る方向から居場所が特定で
きたんだけど。そんなに甘くは無かったね」

それを聞いた僕は考えた。

「けど、そんな離れた所から狙えるんだったら非常にまずい」

「なんで？」

「狙われたら一貫の終わりだ……戦闘体制をとる前に狙撃された
ら手の打ちようがない」

「うーん、確かに気づいたら死んでるパターンだね。わたしも撃
たれたの着弾するまでわからなかったし」

「気をつけてなんとかできるレベルじゃないな……」

ルーシーを常に戦闘状態にしておけば魔弾は防げる。

けどそんなことは不可能だし（光の玉をプカプカさせて歩いてた
ら目だつてしょうがない）、

フィウがいる時に出せば、また暴走する。

「やっぱりこちらから仕掛けるしかないかな」
と物騒なことを言うフィウ。

「いやいや、簡単に言うけどやり合ったら間違いなく死ぬぜ。僕
が」

フィウは大丈夫だろうけど。

「うーん……」

「なんにせよ、敵の情報が欲しいな。何人いるとか、どんな能力
を持っているかとか」

「無理だよ。そういうのって普通は隠してる奴が多いじゃない？」

「まあ、普通はそうなんだけどね」

一般的にいうと、自分の得意技や特殊な能力は公にしない。

戦うときに、相手に自分の能力が知られているか、知られていな
いかで戦い方が変わってくるからだ。

例えば僕だったら、ルーシーが一番の武器であり、これが有効に
利用できるかできないかで話しが全然変わってきてしまう。

戦う前に、>ルシールの腕輪くを何らかのかたちで取り上げられ
たら、何もできなくなってしまう可能性がある。

だからこのことはなるべく戦う相手に知られたくないのだ。

といつても僕みたいな低レベル戦士の能力を知りたい奴なんか誰
もないので、元々心配する必要もないんだけどね。

「情報屋に聞いてみようか？」とフィウが言う。

「ああ、それでもいいけど……基本的な情報だったらあそこにあ
ると思うぜ？」

と僕が言うと、

「？」

ポカンとした顔をしていた。

まあたいした情報じゃないと思うけどと、僕は付け加える。

・VS 王立騎士団のブーメラン使い

+++

「ほら！あつた、あつた！」

目的のモノを見つけて喜ぶ僕。

「うーむ」

フィウは難しい顔をする。

僕は町の役場に来ていた。

そこには、国に係る様々なパンフレットがある。

『求む！兵隊』

『君も公務員になろう！』

『資格を取るなら町役場』

『ストップ！脱税』

『税金を払おう！！』

それらのパンフレット中には、王立騎士団の紹介が書いてある物もあつた。

彼らは役人の中では花形的な位置づけであり、メンバーの紹介記事なども多い。

「おいおい、こいつはヤバイぜ……」

何処を防御しているのだから解らない、薄く面積が狭い鎧を着けた巨乳戦士。

全く鍛えている気配のないお嬢様系の剣士。

ピンクの髪でツインテール、ミニスカートの魔法使い。
などの騎士団員の紹介記事が書いてあった。

間違って王立騎士団の入団試験を受けてしまいそうだ……。

「……………」

フィウは黙って棚にパンフレットを戻す。

「なんか役に立つ情報あったか？」

僕が質問すると、

「真面目にやれ!!」

ポカンと頭を殴られた。

「騎士団員の情報載ってるじゃん！チョットだけど」

「こんなのただの客引きよ。客引きパンダよ！」

「……………」

パンだって何？

そんな質問をする間もなく、

「もう行くよ！」

フィウは怒って出て行ってしまった。

急いで後を追いかけていくと、役場の出口の所に白い鎧を着た男が一人。

「王立騎士団に追われているのに、国の機関である役場に来るとは良い度胸しているじゃねーか……………」

青い髪に細身の体の男。白い鎧は胴当てだけが金属で造られている。

手には、身長の高さほどもあるつかと言うブーメランを持っていた。

「畜生、パンフレットに載っていた女の子じゃない！」

「……………」

フィウは凍てつくような目で僕を見つめる。

「……………ていうか騎士団って言う割には、剣を持っている奴が全然出て来ないな」

話題を変える。

「……………」

話題を変えるのに失敗した。

「ていうかフィウがいると、ルーシーが出せないんだけど」

「はあ」

「……………」

出せないから、王立騎士団と一人で戦って欲しいという意味で言っただが伝わってないようだ。

なに言ってるの？という感じで僕を見つめる。

そんな様子を見てブーメランを装備した王立騎士団が話し出す。

「おいッ！俺様を無視しやがって！王立騎士団をなめるんじゃない

ッ！……！」

怒り心頭のご様子だ。

ブーメランを持った王立騎士団の男は、戦闘体勢に入った。

僕は「仕方ない……………。一人でやるか」と言っただけで腰から剣を抜く。

どうせあんなデカイブーメラン、建物の陰に隠れれば当たらないだろ。

僕も戦闘体勢に入った。

フィウは黙って見ている。本気で戦わないつもりだ。

相手は体を低く構えて巨大なブーメランを投げる体勢に入る。大きく振りかぶると、

「おりゃ　　ッ!!!」

叫び声を上げ、僕に向かって投げつけた。

僕はすぐさま柱の影に隠れる。

すさまじい風きり音と共に、こちらに向かってきた

ヒュン。という音と共に軌道が変化するブーメラン。

「!!!」

柱の陰に隠れた僕に向かって進路を変更する。

(でも、予想通りだ。これくらいの変化だったら僕ではなく柱に当たってはね返るはずだ)

しかし、そうわかっていても怖いので体を縮めた。ブーメラン特有のブーンという低周波音が近づいてくる。

間もなく石でできた柱に当たった。

ガキッ！バキバキバキバキ！

柱に当たったブーメランが止まらない。

石を破壊して僕を狙ってくる。

僕の体にブーメランがめり込む直前、無意識に剣でガードした。激しい音と共に剣が真っ二つに折れる。

「……………　　ッ!？」

僕は武器が無くなった。

・VS 王立騎士団のブーメラン使い 2

+++

と思っただけど、僕にはこの間手に入れた魔銃があった。
探偵から奪い取った武器。

突っ込んでくるブーメラン使いの男に向かってそれを構える。
といつても男、今はブーメランを持っていない。

僕の方に投げてしまったから、手には何も持っていないのだ。

「ウオオオオオ！銃ぐらいで止まるかよ！王立騎士団をなめる
んじゃね ツ！！！」
そんな状態であるにも関わらず突っ込んでくる男。

「止まれ！止まらないと撃つ！」

丸腰の人間に、銃を向けるのは気がひける。

ましてや僕が今、手にしているのは殺傷能力抜群の魔力をおびた
雷撃の弾丸。

当たった人間はイカズチに焼かれ死ぬ。

「アロー・アイランド・ゴールド様のお通りだアアア！」

「チツ……」

名のりながら猛進してくるゴールド様に向かって、銃を撃つ。

「うおりやああああ ツ！！！」

僕が撃った弾丸に向かってコブシを振るう、ゴールド。

バキィ！っと言う激しい音がフィールドに響き渡る。

音速を超えた拳は鉄をも破壊する。
銃弾は溶けて無くなってしまったが　今度は残った魔力をゴールドを襲う。

バリバリバリバリ　という音と共に、

「アガガ……………」

雷撃を受けた男は黒焦げになり地面に倒れた。

「殺ったか!？」

「……………　。　まだまだあああ　ッ!!!」

立ち上がるゴールド。

(不死身かよ……………)

銃の力と魔法の威力を兼ね備える魔弾をもつても倒せない相手。

僕が銃に新しい弾を込めようとしている間に、突っ込んでくるゴールド。

僕に向かって拳が振り下ろされる。

バキイイイツ!!!という音がして体が吹っ飛ぶ。

僕は意識も吹っ飛んだ。

死んだか?

「……………」

目を開けると空が見えた。

まだ立ち上がれない……………首だけ動かして周囲の状況を確認する。

天国ではない、戦っていた場所。

目の前には、ゴールドが倒れており、

今にも立ち上がるうとしてるが、魔弾を受けたダメージが残っているのである。

生まれたての小鹿みたいにプルプルしていた。

僕がさっきのパンチで死ななかったのは、彼がダメージを受けてたせいだ。

あれだけの威力を持った拳。

それがなかったら僕は死んでいたはず。

しばらく気を失っていた感じがするが……意識を失っていたのは一瞬だけだったようだ。
なんとか起き上がろうとするがさっきのダメージのせいで動けない。
い。

気づくとフィウはそんな僕をかがんで見つめていた。

「大丈夫？」

字面上は心配しているように見えるが、僕が瀕死の状態にそぐわない間の抜けた声で質問してくる。

「大丈夫なわけねーだろ。剣は折れちまったし……ていうか下着ぐらい履け」

僕は彼女を見上げる体勢になっている。

丸見え。

「わたし、下着はかないんだ」

「まあ、そんなフィウオン・レイニー豆知識はどつでも良いのだけれど……ていうかお前が戦え」

「男同士の戦いに口は出さないの」

「うつつ……お前が僕に対してやってくれることは『大丈夫？』って声をかけるだけか？」

「それもそうね。じゃあ、折れた剣の変りになる武器を私が出し

てあげる。ちよつと時間を稼いでおいて」

「時間稼ぎ?……無理」

これ以上はがんばれない。相手が強すぎる。

もしくは僕のレベルが低い。

……おそらく後者の要素が大部分を占めているだろうが、相手が強いせいもあるはずだ。

「がんばって!」

それだけ言つと、このフィールドから離れていった。

やがてゴールドが立ち上がり、僕の方に向かってくる。

「ゴブシだあッ!!ゴブシで勝負をつけてやる!!」
物騒なことを叫ぶ。

フィウの方に目をやると、僕の折れた剣を拾いあげ、それを使って自分の手首を切った。

(……!……!)

光の文字で魔法陣を作り、そこに手首から出た血を流しながら詠唱する。

それが少しずつ、武器の形に変化していった。

……少しずつ、すこしずつ。

「遅ええええ!!」

死んじやう、死んじやう、死んじやう。

そんなスピードで武器を造ってたら、それが完成する前に、僕の死体ができちやう。

そんなことを考えている間に、ゴールドが近づいてきた。

ゴブシで語り合う気満々の顔をしている。

僕の手には銃は無かった。さっき殴られた時にどこかへ無くしてしまっただらしい。

「うおりゃあああ　　！！」

ゴールドが服に掴みかかり、僕の体を無理やり起こした。殴りかかってくる。拳が僕の顔にめり込むと、激しい打撃音と共に体が吹っ飛ぶ。

「ゲハッ……………」

「お前に仲間を殺すことになった人間の気持ちがあるか　　ッ
！！仲間には殺されることになった人間の気持ちが解るか　　！！

「……………」
強い殴打の音と一緒にそんな言葉が聞こえてきた。

おそらく大家さんの息子の身代わりで吊るし首にされた、王立騎士団員のことを言っているのだろう。

「お前は人間じゃね　　ッ！！！！」

「……………」
ゴールドはそう言いながら、僕のことを殴り続けた。

「王立騎士団をなめるんじゃないやねえ　　ッ！！！！」
そう言いながら殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、ボコボコ、バキバキ、ドコッ、骨と骨が当たる音が聞こえる。

一方的に僕が殴られている音だ。

「……………」
だんだん意識が遠くなって行く。

「テメエも男だったら、立ち上がって殴り返してこいや
ッ！！！！！！！！」

そう言って、殴る殴る、殴る、殴る、殴る、殴る。

・VS ぶちギレゴールド！！

+++

殴られすぎて聞こえが悪くなってきた耳に、

「お待たせ〜」と話すフィウの声が聞こえる。

その時、

僕のことを鬼の形相で殴打するゴールドの腹から、赤いサファイヤの色をした刀が生えてきた。

ように見えた。

フィウが魔法で作った刀でゴールドを突き刺したのだ。

刀が生えてきた。

まるで地面から草が生えてきたように。

なんでそんなような表現になったんだろう……。。

我ながら疑問に思った。

（そうか、刀がゴールド体を貫いた瞬間に音がしなかったんだ）
きつと切れ味がよすぎるせい……。

物体を切る時に抵抗がないから音がしないんだ。

だからスルッと生えてきたんだ。

その証拠として刺された本人であるところのゴールドは、そのこととに全く気づいていない。

「おいッ！！聞いてんのかテメエー！！」

と言って僕を殴り続けている。

腹に刀が刺さっているのに、

地面には、僕とゴールドの血で、たぶたぶと池ができていていると言
うのに。

切れ味の良すぎる刀は、重力に引かれて下に落ちていく。
そしてゴールドに刺さった刀は、やがて彼の腹から下を取り分けられたショートケーキの様に切り分けて地面に落ちる。
まるで役目を終えたかのように。

「……………」

フィウは、僕を見下ろしている。

気が遠くなる。

と思つた瞬間。

切り分けられてしまったゴールドは、体を支える力がなくなつてしまつたので、

僕の服をつかんだまま、そして拳を振りかぶつたまま　　前のめに倒れた。

僕に覆いかぶさるように。

そして、出血多量で気を失つてしまつたようだ。

「……………たふでつたのか？」

(約：助かつたのか?)

口の中が切れていて、歯がほとんど折れてしまつたせいで話せない。

そして、殴られすぎて動けない。

「お兄さん……………。反省した？」

フィウが質問してきた。

「おばえはばびをびつでぐんば？」

(お前は、何を言ってるんだ?)

「これに懲りたら、他の女の人で鼻の下伸ばしたら駄目だよ」
何を言ってるんだこいつは？
ていうかフィウの嫉妬で、僕はこんな死にそうに　　ボコボコの
グチャグチャになっているのか……。
いや、違う。きつとそんなことはない、ただのドSだ。
変態ドS少女エルフだ！
もうキャラ設定がブレすぎて訳がわからないよ。

なんてことを考えていると馬が駆けるヒツメの音が聞こえてくる。
馬に乗った男は、急いでここまで来ると馬から飛び降りた。
そして、

「ゴールドさんッ!!!?」
と言つて、腹から下が真っ二つになったゴールドを助け起こす。

手には、僧侶が持つ巨大なルーンスタッフ。
僕の先端が巨大なハンマーのようになっていた。おそらく回復は
後回し、攻撃重視の杖なのだろう。

その男は「ひでえ……誰がこんなことを……」と言いながら涙を
流している。

それを聞いてフィウが手を上げた。
私がやりましたと言わんばかりにしっかり手を上げた。
実際にやったのはこいつだが。

「お前がやったのか!!!」
怒り狂う僧侶。

「その人、まだ生きているよ。あなたも王立騎士団のメンバーな
の?」

と手を上げたまま聞く。

「俺は王立騎士団じゃね

ッ！！ゴールドさんの舎弟だあ

ああ！！！」

それを聞いたフィウは、

「そう」

と短く答える。

「ゴールドさん！！死ぬな！！しっかりしてくれえええ」

大の大人が泣きながら、ゴールドを助け起こし馬に乗せる。

それが終わると、「テムエら覚えてやがれええええ！！！！」と叫び、大急ぎで去っていく。

その様子を見てフィウは、

「あつ、こつちも治療しないとまずいわ」と言っつて僕を抱き起こす。

そして、僕はそのまま宿に連れて行かれた。

・VS 新ぶちギレゴールド!!

+++

町の外れの掘っ立て小屋にゴールドは寝かされていた。

腹の下でグルグルに巻かれた、血だらけの包帯が見るに痛々しい。

やがて彼は、目を覚ます

そして、彼が気がついたのを、看病していた男が気づく。

「大丈夫か？ゴールドさん」

「何日くらい寝てた？」

「丸三日寝っぱなしだったよ」

「そうか……」

ゴールドはベットから身を起こそうとする。

「まだ起きるな、ゴールドさん！あんた、死んでもおかしくない体なんだ！」

「バカヤロ

ッ！！こんな時に寝てられるかあああ

あー！！」

ゴールドは、起き上がるのを止めようとした男を殴り飛ばす。

その騒ぎに気づいた、他の男が部屋に入ってくる。

「ゴールドさん、まだ動いちゃ駄目だ！！」

「こんな怪我……！！気合でなんとかしてやる……！！」

と言ってさらに止めに入った男を蹴り飛ばす。

そして続けて、

「おいッ！トヤマ建設にいつて例のブツ借りて来い！！！」と言
う。

「……………ッ！！！」

「……………」

ゴールドは黙って男を見つめる。

「本気なのか……………ゴールドさん？」

先程蹴り飛ばされた男の顔が青ざめる。

「ああ」

短くそう答えると、言われた男は、

「わかった」と言っつてその場所を後にした。

男が出て行つた後ゴールドは、

外の様子を見るために家から出る。

するとそこには異様な光景が広がっていた。

ゴールドは、自分の目を疑つた。

まっ平らの地面、地平線まで埋め尽くすような騎馬の大群。

それは、王立騎士団に属しているゴールドの兵隊ではない。

ゴールドがかつて一緒に遊び、戦つた、かつての悪友達。

以前ゴールドは、馬に乗つて街中を縦横無尽に走り回り、様々な
悪さをした。盗んで、壊して、叩いて、盗んで。

盗賊まがいの行為、まさに暴れて走つた。

若かつた頃のやんちゃなことをした思い出。

・VS 終ぶちギレゴールド！！

+++

小さな田舎町の大通りを埋め尽くす、シヨベルと無数の騎兵隊。町の住人は、恐れおののき彼らに道を譲った。

その集団の先頭を走る黄色いシヨベルには、トヤマ建設の文字。それを操縦するのは、王立騎士団のゴールド。

後ろに続く騎兵は、1000以上の数にのぼる。

その姿は、まるで一体の馬鹿でかい恐竜のようだ。

やがて、町外れにある一軒の宿の前で彼らは、停止した

+++

「なんか変な音が聞こえる」

フィウが耳をピクピクさせてそう言う。

「僕には聞こえないけどね」

エルフは、耳が良い。人間には聞き取ることのできないような小さな音にも反応する。

「……………しっ」

僕にしゃべることをやめるように促すフィウ。

彼女は聞き耳を立てている。

「……………」

「まずいわね。すごい数の騎兵がこっちにやってくる足音が聞こえる」

「もう見つかったのか？」

「おそろく……ね」

そして、

ドカツ、バキバキバキバキ……という音と共に宿屋の屋根が破壊され、

黄色いシヨベルが現れた。

「うわッ!？」「キャッ!」

僕らは窓から外を覗くと、一台のシヨベルと、無数の騎馬隊。

その一番前にいる一人の男が大声で叫んだ。

「出てきやがれ !!!!!!アロー・アイランド・ゴール

ド様のおでましたあああああ!!!!!!」

この間、戦った相手だ。

宿屋の回り全部が、無数の騎兵隊に囲まれている。

これでは逃げる事ができないだろう。

急いで外に出ようとする、宿屋の出口の所で、ゴールドが腕を組んで立っている。

僕は彼に、

「勝負の方法はどうする？まさかこんな街中でドンパチやるつもりはないよな？」と言う。

「バカヤロ ッ!!!!!!そんなまどろっこしいこと、やるわけねーだろおお!!!!!!」

そう叫ぶ。

「じゃあ、どうするんだ？」
うるさい。

「俺とお前の……拳だけでのタイムン勝負じゃああああ

ッ!!!!!!」

これだけの兵隊を連れているのにタイマン。
シヨベルや大人数の騎兵隊を使うのではなく。

一対一のタイマン。

武器を使うのではなく拳で。

きっと相手は、この前の傷が癒えていないはずだ。

立っているのもやっとだろう。

いいだろう、やってやる。

僕も男だ。

「かかってこいや

……!!」

僕はゴールドに殴りかかる

「死ねや

ッ!!」

それに呼応して、殴り返すゴールド。

夕暮れの中、僕らは殴りあう。

大勢の観客が見ている中で。

それを見ていたフィウは、

(一対一で戦うんだったら、シヨベル持ってきたり、この大群連
れてくる意味ないんじゃないの……)

と思っていた。

小さい少女が列車を待つ広場で唄を歌っていた。

気分が滅入るようなメロディ。

悪い歌って訳じゃあない、どつちかって言うと良い歌なんだろう。歌なんか普段聞かない僕でさえそう思えた。でも聞くとなぜだか死にたくなるような、悲しい歌だったんだ。

彼女と不意に目があつたような気がしたので、声をかけてみた。

気がしたって言うのは、少女の顔から上半分がフードで隠れてしまっていたから。

後々考えてみると目が合ったって言うのは、気のせいだったのかもしれない。

「君も列車に乗るのかい？」

「もちろん。だからこの広場にいるんだ」
そう言われた。

魔術師が着るようなローブを着ており、その服についているフードを目深にかぶっているため顔は見えない。

だがゆつたりとした服を着ていても解るような体のラインと、そしてよく通る高い声から察するにおそらく子供である。

「何処まで行くんだい？」

僕がそう聞くと意外な答えが返ってきた。

「ミストラルまで」

短く用件だけ話す、最低限の会話。フードはかぶったまま、僕の方を見ようともしなかった。

「おいおい……。一緒に行く保護者はいるのか？」

「そんなものはいないよ」

「それだったら……。やめておけ。国の目が届かないような辺境だから、治安が悪くモンスターも凶悪って噂だ。子供が一人で行けるようなところじゃあない」

そう言つと目の前の少女は、

「アンタはミストラルを自分の目で見たことがあるのか？」と言
う。

「そんな危険な所に行くわけないだろう」

「じゃあアンタは、空っぽでつまらない人間だ。本物を見もしないで、他人によってつくり出されたコピー品の言葉で満足している」

「いきなり何を……」

親切のつもりで言ったのに酷い言われようだ。

「でもそれは間違っちゃいない。この世の中の多くは、オリジナルのないクソみたいな模造品で造られている。安くて、手に入れやすくて、誰かの真似をしたような見るに耐えない粗悪品であふ

れかえっている世界」

だいぶ背伸びしているような話し方だが、妙に様になっていた。聞いていて不思議と違和感がない。

「まあ、君の言いたいことは解るけど世の中行き当たりばったりじゃあ、すぐに死んでしまっぜ」

しよせん子供の言う事だ。こんなきれいな事、いわく理想論。僕は適当に聞き流すことにした。

「アンタはなんで生きているんだ？」

そんな僕を見越して、少女は僕に質問する。

「そんなモノ考えたことないな」

本音だ。今までの人生は生きていくだけで精一杯だった。

親に捨てられ奴隷商人に拾われた。簡単に言ってしまうえば、泥水をすすって生きていくような下らない人生。

けれども行き当たりばったりで死ぬために生きている訳でもない。

「じゃあ、アンタは何で動いているのだろう。ゼンマイの巻かれたブリキのおもちやのように勝手に体が動いているんじゃないのか？」

「そうかも知れないな」

ごまかしたわけでも、格好をつけた訳でもない。本気でそう思っている。

「いや、私には解るぜ。目を見れば一目瞭然だ。アンタという透明なコップでできた器に、真っ黒い墨のような後悔、恨みと憎しみが入っているんだ。お前はそれでできているんだ」

少女の言う通りだ。あつたばかりの少女に僕の内面すべてを見抜かれた気がした。

*

「僕の中身は、真っ黒い墨のような後悔と、恨みと憎しみでできている」

自分で自分に言い聞かせるような、もしくは自分に問いかけるような独り言。

自分でもどっちだか解らなかった。

少女は、洗いたての様な白いシャツに黒いネクタイ、そしてシャツと同じ色のショートパンツを履いている。

その上から、魔術師が着るようなローブを羽織っていた。

ローブの色は白。冒険者は白を好まない。

理由は単純、遠くからでも目立つから 敵の標的になりやすいのだ。

白い服に加え、もう一つ特徴的なのは異常なほど長い魔法の杖。

少女の背丈の倍はあるつかという、銀色の杖は遠目からでも目立つ。

杖の先端には、宝玉をくわえた竜と、アクセサリーに天子の羽が飾られている。

「僕の人生はこれからどうなるんだろう？」という僕の問いに対して、

「私たちは、列車に乗るときに何を払ったか覚えているか？」少女が答える。

「列車を乗るために必要なのは運賃だろ」

「その通り。では人生を進むために列車に乗る場合は何が必要か解るか？」

「人生……さあ、正直解らないな」

人生と言うレールを走る電車に乗るために必要なモノ。

「時間だよ。アンタは何に対して時間を払った？」

「要するに時間を切符代に見立てるってことか……そうだな、残念ながら僕の人生は後悔と世界を恨む事しかしていなかったな」

「ほう。良いじゃないか」

「良い事なんて何もないだろう。恨みと後悔の人生がなんの役に立つと言っただ」

「アンタはそれを何も役に立たない事だと思っているようだが、それは大きな勘違いだよ」

「勘違いなことがあるものか」
僕はそう反論する。

「この瞬間　後悔と恨みが君の人生において、何も役に立たないことを知った」

でも、少女はそのことに反論した。

「今さらそんなことを知ってなんになると言うんだ。今までの人生を全部無駄にしてきたようなものだ」

僕はさらに言い返す。

「乗る列車を換えたら、運賃はまた最初から払わなくてはいけな

いんだよ」

「また、一からやり直しか」

絶望的な答えに僕は肩を落とした。

「そうだ。でも、良かったんじゃないか。前に乗っていた列車の終着駅は地獄だぜ」

「なるほど。たしかに運賃を払い続けていたらそろそろ到着するころだったかもしれないな」

「いやいや、乗り換えたって言っても油断しちゃあいけない。ア
ンタの人生は、その分進んでいるんだよ。今度乗る電車を間違えたら、何時地獄に着いてもおかしくないぜ。ハハッ」

馬鹿にしたように笑う少女。かぶっているフードのせいで表情が解らない。でも、口元は意地の悪い笑みを浮かべていた。

・VS 王立騎士団のクマ

*

今、僕の目の前にはクマがいる。
クマって言っても普通のクマじゃあない。
何が違ってる？ 服を着ているんだ。

そう、まるで王立騎士団の制服を似せたようなつくりの白い軍服。
可愛がられている犬が飼い主に服を着せられることがある。
そんな感じ。
それを馬鹿でかくした感じ。

「ガウガウガウ ツー!!」
すごい剣幕で僕に吠え掛かる。

「いや、何を言っているか解らないから……」
唾然としていると、

「オレは王立騎士団メンバーのヒグマだ ツー!!って
言ってるわよ」
フィウが僕に説明する。

「お前、クマ語が解るのかッ!?!」
「一応、たしなむ程度には」
「たしなめばクマと話せるのかよッ!?!」
さすがエルフだ。

たぶんエルフって言うのは、比較的気軽に動物と話せるんだらう。

「ガウガウガウガ　　ッ！」

「勝負しやがれ　　ッ！って言ってる」

フィウは、もう外国人の横にいる通訳の人みたい。

「無理だよ。クマと勝負して勝てるわけねえ。ていうかクマをメ
ンバーに入れるなんてどれだけ人材不足なんだよ。王立騎士団って」

「この間の建設会社の職員崩れといい、ロクな人材がないわね。
そんな騎士団なんて、つぶれてしまえば良いのに」

フィウは辛らつな意見を述べる。

「税金の無駄使いだよな」

僕もそれに乗っかって話す。

しかし、よく考えてみたらクマは人ではない、人材ではないクマ
材だ。

そんな与太話をしていると、クマが僕らの方に来て吠え始めた。

「ガウガー！」

「国民の税金はキチンと考えられ、皆様のために適切に使われて
います。我々政府関係者は、皆様のより良い生活と安心できる地域
づくりを目指して日々努力していきます！って言ってるわ」

「ホントかよッ！！？」

科白の長さが全然違えし。

「ガウガウガ　　ッ！！」

「年金をしつかり納めましょう！」

「もう僕らの戦いと全く関係ない事しか言ってるねえッ！？」

クマは大きく振りかぶって僕に襲いかかろうとしている。

（　　）　　まずい。あんなクマの攻撃を喰らったらただじゃあすまない）

そう考え、僕は懐から魔銃を取り出した。

「ラスト一発ッ！！」

盗賊のごとく奪い取った銃の弾は残り一発。

それを使用して、速めに勝負をかける。

僕が銃のトリガーを引くと、乾いた爆裂音と共に

クマの眉間に銃弾が突き刺さる。

「ガウガー！！」

「ヤラレター！！」

いや、もう訳さなくていいから……。

クマが倒れた後に、その巨体は魔弾の炎によって燃え始める。

やがてクマの体は燃え尽きてしまった。

「なんとか倒せたな……」

「ねえ？」

フィウが問いかけてくる。

「なんだよ？」

「このクマなんだけど、燃やさなければ肉とか毛皮売れたんじゃないかなと思って」

「そう言われてみるとそうだな……」

と言いながらも、クマではなく王立騎士団であった事を考えると複雑な気分になって。

燃え尽きて良かったんじゃないかと思った。

*

「僕は人に受けた親切を覚えていることができない。次の日になればキレイさっぱり忘れてる」「親に生んでもらった事は忘れた。どうでも良いこと」「かけがえのない友情も覚えている事ができなかつたんだ。記憶力が悪いから」「みんなでやった楽しい事もあつただけで、今では一つも思い出すことができない」「でも僕自身に向けられた悪意は忘れることができない。例えば時間がたつて忘れていたとしても、ふとした拍子に思い出してしまう。忘れよう、忘れたいと思つていたとしても、僕の心にへばりついていてとれない。砂糖を限界まで溶かしてできた水を飲んだ時にノドに引かかる感じと言えば解りやすいのだろうか……」

「 解らない。何を言っているか」

目の前の少女に否定された。

「ごめん。寝ていたら急に昔のことを思い出して……でも、笑つていたら怒られたんだ。いつも」

「誰に？」

「覚えていない。友達、知らない人、育ててもらった人」

「そう」

「別に死にたくないわけじゃないんだ。生きていればなにか答え

のようなモノが見つかる気がする。きつと、何かしらの意味があるから生きているんだ」

「うん。着いたようだ 目的地に」

*

「見るよ、これがミストラル。何にもねえクソみたいな町。まるでアンタが歩いてきた人生のような町だな」と少女が言う。

「何も無いところだ……」

今まで乗っていた列車で来れるのはここまで。

この町で降りた旅人は僕らを合わせて、たった5人しかいない。こんな辺境まで、来る物好きなどそんなにいないのだろう。

「狙ってる……貧乏人が、追いはぎが、犯罪者が、変質者が、何か盗めるモノがないか」

「気にしすぎなんじゃないのか？」

そんな気配は感じない。

無機質な光景。ただ閑散とした景色。

僕らの目が届く所に人が居るようには思えなかった。

「アンタみたいな素人に悟られていたら、彼らの仕事も上がったりになっちゃうよ」

「……………」

少女の機嫌は良いようだ。

この町に下りてからずいぶん饒舌になった気がする。

「煤けた町に、煤けた人間、煤けた道を歩くと何がある」

「おいおい、人が居たら聞こえちまうよ」

「しけた町だ」

「そういう事は言うもんじゃないぜ」

「なんでかな？」

「そういうもんだろ」

「アンタは人の言葉を借りて、自分で話したかのように振るまっている訳だ……このクソ野郎　しかも盗人、生きている価値無いね」

「言いすぎだろ……」

目の前の少女の齒に衣を着せぬ物言い。

「むかつくねえ。すげえむかつく。死なねえかな、今すぐ」

「おいおい……」

「アハハハハ　なんにもねえ。なんにもねえ。存在している意味がねえ」

酷い言われようだ。

けれどもその少女に、はっきりとモノを言われると不思議と腹は

立たなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2565z/>

理由がない悪意のクエスト。

2012年1月3日02時46分発行